324-163

禪學講話

明治
43. 1. 29
内交

遊戯三昧

第一　大智禪師と菊地氏の勤王美人禪……一
第二　……二三
第三　山鹿素行と大石良雄……四五
第四　賣茶翁……四八
第五　夜雨和尚……六七
第六　平田大壑……七二
第七　竹田居士……七五
第八　風外和尚……八三
第九　誠拙和尚……九五
第十　佛通和尚……一〇九
第十一　物外和尚……一一九

第十二　瑞溪和尚……一二九
第十三　佐野長寛……一四〇
第十四　鐵翁和尚……一五四
第十五　巧者長八……一六九
第十六　翰墨因緣……一七四
第十七　澤庵和尚と德川家光……一九一

沒柄破杓

第十八　臨濟と曹洞……二〇九
第十九　道元と一休……二一〇
第廿　鶴林翁と老螺蛤……二一一
第廿一　朱舜水の學佛說……二一一
第廿二　與田幸村の奉佛……二一二

第廿三　虎溪三笑……二一三
第廿四　玄ちやん……二一八
第廿五　禪宗の奠茶……二一八
第廿六　白木屋の家憲……二一九
第廿七　鶯派の肉食……二二〇
第廿八　酒は酒家……二二〇
第廿九　學齋與禪同……二二一
第卅　昔の寒山寺……二二一
第卅一　日煇和上……二二三
第卅二　土佐と禪僧……二二四
第卅三　大智の偈頌……二二四
第卅四　森田宗禪……二二六
第卅五　みゝな草……二二七

第卅六　菊花を食する事……二三四
第卅七　遊戯……二三五
第卅八　雪花の古歌……二三六
第卅九　湊川碑文の筆者……二三六
第四十　獨立禪師の種痘法……二三七
第四十一　不昧公の茄子賛……二三八
第四十二　玄虎藏主の逸事……二三九
第四十三　大智と隱元……二四〇
第四十四　大雅の禪學……二四一
第四十五　寂室の緊要一訣……二四一
第四十六　天桂老人の儉德……二四三
第四十七　了然尼の父……二四四
第四十八　白陰和尚の墨戯……二四五

第四十九　同福錄壽の賛……二四五
第五十　足利時代の史記家漢書家……二四六
第五十一　一戀字……二五〇
第五十二　中正藏主……二五一
第五十三　日本の紙筆墨……二五二
第五十四　三聖の眞面目……二五二
第五十五　梅花十態……二五三
第五十六　永富獨嘯庵……二五三
第五十七　萬里公の異聞……二五四
第五十八　獨立禪師の印章……二五五
第五十九　申上……二五五
第六十　威化盗賊……二五六
第六十一　舊窠泥……二五八

第六十二　息耕老漢の名言……二五九
第六十三　茶道三變……二六〇
第六十四　秋風道人……二六〇
第六十五　文繡聾悅……二六二
第六十六　石門と薛黃二公……二六三
第六十七　東海の海豚……二六五
第六十八　聖一國師の生家……二六六
第六十九　華岳寺の驅烏……二六七
第七十　めでたき事……二六八
第七十一　狩野山樂……二六八
第七十二　南化國師と豐臣氏……二七〇
第七十三　桃青のよしこの……二七〇
第七十四　文治經桌……二七一

第七十五　老螺蛤の繪事……二七四
第七十六　石川丈山……二七四
第七十七　瞋恚……二七五
第七十八　一路居士……二七六
第七十九　學貧……二七六
第八十　板隊と月庵……二七七
第八十一　近世緇流の繪事……二七八
第八十二　夢想國師の遺誡……二七九
第八十三　曇華道人……二八〇
第八十四　ヒトロヴオ氏……二八二
第八十五　藤樹先生の如來說……二八四
第八十六　關山と隱元……二八五
第八十七　雪舟の詩……二八五

第八十八　聖一國師と博多織……二八六
第八十九　彩奔齪家……二八八
第九十　萬里公と文觀……二八九

禪學一夕話

森大狂著

第壹編　遊戯三昧

(二)　美人禪

碧眼胡僧の道、一たひわか日本に傳はりしよりこのかたは、禪風つひに天下を靡みするにいたり、閨閣の婦女子か中にも、ふかく心を禪要に寄せて、見地明白なりし者いと多かりき。まづ檀林皇后をはじめとして、佛光國師における千代野了庵和尚における慧春尼のごときは、そか中のもとも著るしきものなり。

近世にいたりて正宗國師白隱和尚の輩起するやその接物應機に巧みなるか故にその門下に多くの女居士をいだしきずなはち阿察女さては杉山政女茶店の老婆某のごときその鮮々たるものにして久參の禅子といへども決して及ふこと能はさりき彼の京都島原の名妓大橋太夫のごときもまた正宗國師の毒手に觸れて徹證したりきいでや二三の書を漁りて大橋か一生の遊戯三昧を描かむ。

大橋實の名を律子といふその姓を失す佛證神照禅師の龍澤開祖年譜に依るに大橋はもと德川旗下の士にて千石餘を食みたる某甲の女なりき某甲如何なる故のありけむ一旦退糧して その妻およひ大橋小弟某の三人を携へいさゝかのゆかりをたつねて京都に來りぬ坐して食へは山をも盡きるたとへにてつひに一貧洗ふかごとくその日〳〵の煙さへも揚けかたくなりける大橋そを坐視するに忍ひす父母に請ふにその身を娼家に賣ることをもてす父母のいはく子を活りて自ら活

るはこれ畜生のなす所なり我もまた德川の流をくみたる者なれはたとひ餓死するとも愛子の肉を食ふへきかはとて之を許さす大橋かたく請ふていひけるはこはまたく方便のみもし之をうけかひたまはされは一家こと〳〵く餓えて死せむ方便もとより眞智におよはすといへとも難を去つて道に入るもまた妨けすと父母つひに已むことを得すして泣く〳〵大橋を島原に沽りきけたし大橋もまた世諺にいはゆる「孝行に賣らる」の例をまぬかること能はさりしなり。

島原にもと初代大橋太夫といへる名妓あり髮かたちは萬人にすくれて麗はしくよく國風をよみわけて筆札を巧にしき世に之をめてい大橋流と稱す今もなほ大橋流の手本として京攝の地にのこりて女子の之を學ふもの少からす。その書風は脊園法親王よりいでゝ別に一家をなし嫵麗にして風前春柳の妙あり。よのつねの遊女ならさりしを知るべしあはれなる旗下の士の女律子は火坑に墜ちてその名をつきて二代

の大橋太夫となりぬ。
大橋さすがに初代の名をつきたるにそむかず、よろづみやびなること
を好み、女紅は云ふもさらなり、文詞を好くし、音律、茶香の末技にいたる
までもみなその道のくはしきに入りき。また繪事をよくしたるとには
あらねど、そのさまいと風流に見ゆ。世に大橋か咏みたる歌二三を傳ふ、
いはく、

海邊雪

和田の原波もひとつに笘しろき
雪をのせたるあまの釣船

自畫の賛

わするなと契りし春は夢なれや
寐覺とひくる初雁の聲

老後島原を過きて

よそにみておもふもつらし身の昔
うき河竹のさとの夕べは

また大橋の國文としては、遊女の畫賛、廣澤池の記の二篇、荻原廣道の遺文集覽に見えたり。こは、大橋か文詞を窺ふべきものなり。

遊女の畫賛

西になかれ東になかるゝ同し川たけの身にしある中にも、八重垣つくると詠したまひし神垣のほとりは、いともやさしく、繪にかけるを見てさへ、まことなつかしうおほゆ。しかはあれと、このふたりのすかたこゝにかきあらはさゝるさきは、ありやなしや。

廣澤記

ことし延享五つちのえたつの夏、卯月はしめの七日、長康のぬしの廣澤の莊へまねかせ給ふまゝに、ちよの古道たどる〳〵、かの林につく分入る野もせ千町ばかりあゆみ行。夏來ても、春のなごりの草の香の

の大橋太夫となりぬ。
大橋さすがに初代の名をつきたるにそむかず、よろづみやびなること
を好み、女紅は云ふもさらなり、文詞を好くし、音律、茶香の末技にいたる
までも、みなその道のくはしきに入りき。また繪事をよくしたるとには
あらねど、そのさまいと風流に見ゆ。世に大橋か咏みたる歌二三を傳ふ、
いはく、

海邊雪

和田の原波もひとつに笘しろき
雪をのせたるあまの釣船

自畫の賛

わするなと契りし春は夢なれや
寐覺とひくる初雁の聲

老後島原を過きて

よそにみておもふもつらし身の昔
うき河竹のさとの夕べは

また大橋の國文としては、遊女の畫賛、廣澤池の記の二篇、荻原廣道の遺
文集覽に見えたり。こは、大橋か文詞を窺ふへきものなり。

遊女の畫賛

西になかれ東になかるゝ同し川たけの身にしある中にも、八重垣つ
くると詠したまひし神垣のほとりは、いともやさしく、繪にかけるを
見てさへ、まことなつかしうおほゆ。しかはあれと、このふたりのすか
たこゝにかきあらはさゝるさきは、ありやなしや。

廣澤記

ことし延享五つちのえたつの夏、卯月はしめの七日、長康のぬしの廣
澤の莊へまねかせ給ふまゝに、ちよの古道たどる〳〵、かの林につく
分入る。野もせ千町ばかりあゆみ行。夏來ても、春のなごりの草の香の

どやかに、日影てりそふかなたおもてには、主の出むかはせたまひて、待かねさせ給ふなどのたまひつゝ、しりへにしたがひてまかる。西のかたのあみ戸を開き入る、若みとり枝さしかはすときは木もやゝしけりあひたるに、つゝじやまふきの花も咲のこりて、さながら錦をわくるやうなり、池のこなたには、釣臺をするゑさせ給ふ。南のかたにより、亭ひきくつくり、軒にかはほりのやうにまどをつく。これよりなかめやれは、小倉山、愛宕の山、花の名におふあらし山、松尾もみねつゝきにて、夏山のみとりはへたる野べ、青みわたれる廣澤の池の水鳥むれゐてあそぶ。おのかさま〳〵、にほやかなる音を鳴て行かふも、たゞ給にかいたらんやうなり。新樹の梢には、蟬の吟をきく。まだしき比なれは、打しきるともなく、しづけさを云ふかしこには、かけひをもり開ゆるそぼつのおこなひ、山にひゝきくるも、いやめづらしく、すべて耳なれぬ事のみ、我ためにやと、いとかしこく、まこと夏のしらぬ國に來た

らんこゝちす。しばしかほど、こゝにやすらひ、かれいひやうのものたうべ、みきなどもてなさせたまはりて、釣臺のもとへゆき、なかめ殘して、中垣しをり戸に入る。東のかた、いづみの水、こゝろこまやかに名もなつかしき杜若のさかり、えもいはす、西のかたには、宮城のゝ荻すゝきをまはらにうゑさせ給ふ。今より秋の千種をおもひやられていみじ、こゝにぞなのめにかけたる橋ゆゑ、なつかしう、もろこしめきてつくりわたせり。からうたを得されは過し給はじと書しるし給ふ。いにしへ今の世のほまれあるたれたれもわたりたまひしと聞傳ふ。いかでかとつとむねつぶるゝはかなきすさひもなくてはゆるしたまはしとて、

　されはこそなかめわたらんことのはも
　　なとおよふべき庭のかけはし

とうちずしてゆけは、せんさいのかけひ、いといたうすゝしくて、みき

はには、紫の雲かとたな引、はふきあまたにかゝれる藤なみさかりなり。左のかたに、泰龍とある額をかけさせ給ふ。岩井の水きよらかなり。めくりは、おのつから苦むせる石のたゝすまひも、なべてならす、庭の上は、色くさをつくして、よしばみたるませをゆひませ、櫻若楓木々のもえき、うすくこきみとりはへたり。東北にそひて、西南おもてに、たかくひきく作れる槇の屋、心ことにしつらひ給ふ。このもかのも見渡すけしき、なか〳〵筆にもおよはす。よゝのかしこき人〳〵の詠し給ひし唐の文、心ばへありて、をかしかりぬべきを書とゝめ。此ろうの床の内、なけしのうへにかけつらね給ふ。南の門を出、東にむかひて、田面に出、山手に行、木立ものふりて、世ばなれたる山は、淺きやうなれと、深きにゝて、口にばうとき鳥どものさへづるも、ことさびて、所からあはれにおもしろき事かきりなし。さかひにのほれば五知の山の流れ、鳴瀧の山、そのほか峰あまたみわたさる。それより松杉竹の林にまかりく

たれる道しけゝれは、あふさきるさに行來る所もわすれぬべう。やう〳〵かのろうに上り、ひねもす打かたらひ、酒肴、海山のめづらしきしなく〳〵をとゝのへさせ、唐のやまとのうつくしきでうどゝもかすしらすならべ、もてなし給はりぬ。まことにかゝるおろかなる身のをりを得て、此莊にかたらひ、おふけなき此情をいかゝいはせんことのはも、おもひたゆたふほどに、あるじの歌をよみて聞えさせ給ふ。

廣澤や月見ん秋を契りおかん
池のこゝろのへだてあらずは

春過て花はちれとも柴の戸を
とふ人からの山のしたかげ

とみにさしいらへもえし侍らて、おこたり侍りぬけにかうやうのたへなるところにわたりては、ことのはも及ばじとき、侍りしも、いまひしとおもひあはされて、いかになどかまねびいでんやうなく、から

うして、つたなきくちずさひに心うけれと、えはぢあへぬかたはしを
もらし侍る。

そこひなくすむべきかけも廣さはや
　　月見ん秋を猶したふなり
よそなから思ひしよりも淺からぬ
　　すむ人からの山の下いほ

ながかりつる日も、いつしか入あひの聲なこりせつなる夕月、ほそく
もかさなる青葉をわけてもりくる光、秋の木の間の心づくしにもま
さりて、庭もまかきも、こよなうあはれふかし。あかずくれゆくたそか
れの空のおほ〳〵しきに、まいて、池の面は打けぶり、えんにをかしく
月さしうつりたる、いはんかたなし。名たゝる春秋は、なほいかならん
とおもふも、一かたならず、とかくやすらふうちに、夜もはや子の刻ば
かりになりぬれば、立かへらむとす、なこりも例のさらに興みだれた

ど〳〵しき道のほともおくらせ給はりければ、うれしくて、たゞゆめ
のうきはしさむれは、おもなくわが家につく。

遊女の賛は、詞つき、いとをかしう聞ゆ。廣澤の記は、つゝしみてものした
りど、にかく、かばかりの筆あらむものは、當時の姫嬪のうちにももとめ
かたかるべし。まいて、よのつねの婦女をや。大橋が浪華の夕霧、江戸の勝
山、さては高尾なと、併せてもてはやされしもげにことわりと思はれ
ぬ。

されど、大橋ほどの女なれは、その境界に朽ることをなさず、禪要に參し
てめてたき女居士となりき。佛護神照禪師の記する所に依りて、その消
息を知ることを得るなり。大橋すでに名たゝる遊女となりて、あまたの
了繫にかしつかれ、衣服調度は、美をつくし、巧をこらし、何の足らさる所
なけれど、さすかに良家に生れたる身とて、そか幸なくして、火坑に墜ち
たるを顧みては、人しれす涙に袖をしぼることありぞ。なはち自ら思惟

へらく、我いやしくも士人の家に生れて深閨の中に養はれたりしに、今や忽ちうきぶしげき流れの身となりて、悲しきに笑ひ、笑しきに泣き、うかれ男のもてあそぶころとなるは、いとあさましとて、思念やうやく積みて沉痾を感じ、名ある醫師もつひに匙子を投ずるにいたりぬ。一日たま〳〵貴客あり、大橋の面色を見て、問ふていはく、汝、憂ふる所あるか。大橋よてつばらにそか病の來由を說く。客の曰く、汝の病める所は、尤も理あり。然れと、今こゝに千金あるにあらすむは、汝か病を治すこと能はす。たゞ一事の底に徹して剔脫すべきあり。おそらくは之を信せさらむか。大橋いふ、君、誠をもて告けたまふ、いかでか信せさるべき、願ふは、教へたまへ。客すなはち語りていはく、汝か一身、見聞覺知を除きて、別に作す底のものなし。四つのものの主あり。行住坐臥見るもの何物ぞ、聞くもの何物ぞと、切々に返覩して怠らされは、本具の佛性、忽然として現前せむ。道箇の田地に到る。是れ便ち苦界を解脫するの要徑なりと。大橋、謹んで

その言を服膺し、これより單々に潛修し、いまだ曾て怠らず。延享中、狂雷大に京都に震ひ、一日に二十八所に隕つ。大橋、性太た雷を忌むかゆゑに、帳を垂れ被を擁し、了髮をしてそか身の左右を護らしめたるか、忽ち猛省して堅坐す。雷聲俄かに震ひ撲然として庭中に隕つ。大橋、仰顚して氣息を絕す。良久して蘇生するに、見聞ほとんど平昔に異なり。師證を得むと欲りすといへとも、そか身の欲染境中にあるをもて、いまだその志を遂るに由なしのち火坑を超出するに及むて、初めて正宗國師に謁して徹證することを得たり。こは實に寶曆元年の春なりき。時に正宗國師六十七歳、請に備前岡山の少林に應して川老の金剛經を講し、次て井山寶福に到りて四部錄を講し、その歸途たま〳〵京都を過きて、その參徒なる世繼政幸の家に投す。都の男女これを聞き、爭ひ來りて參禮す。大橋すなはち來りて參得底を呈したるなりき。世に大橋か語句を傳へさるをもて、その見解の如何なりしかを知るに由なしといへとも、國師の年

譜に「度大橋女」と記せるをもて察するに、必らずや契ふ所ありたるを疑ふべからざるなり。

けだし、これより先き、大橋は、或る人の爲めに贖ひ出されて、その婦となりき。幾ほともなく、その夫に先たゝられて、また栗原一素といへる者に嫁しぬ。閑田子は記していはく、「さばかりの女なれば、中〳〵につひのよるべもなかりけらし。尼にならんと思へるを、老たる母のためいかにとためらふほどに、栗原一素といへるは、世のすねものにて、猶あぞを、よき戯がたきなるべしと、人あはせけり」。また一素の人と爲りを記していふ、「おのれまたわかき時、夫婦ともにしれり。夫はもと類ひなき遊蕩にて、美少年に演し、家産をも破しときけるに、後はあらくれし老法師にて、大こゐにてよくものいひ、萬のことみなしれるおもゝちして自負せるを、にくむ人もあり、與する人もありき。京のうちにては、人のしれるをのこなりしも、今は四十年のむかしなり」とにかく、一素もたゝうとにはあらさ

りしと見ゆ。かくの如く、一素の家いと貧しかりければ、奴僕をめし使ふこともなりかたく、大橋手つから雜事とも取まかなふに、猶うた物がたりを見なから、飯をも炊きたりき。きのふまても、錦金窩にありて、紅粉をよそほひ、華奢をきそひたる身も、うきことになれて、雪間の嫁菜をも摘みたるなり。その清貧おもふべし。

薄命の美人零落の才子、相得て和し、風流遊戯をもて樂となしぬ。閑田子記していふ、「花もみちの時、男はもちいひを腰につけて東山に遊べは、己れはさゝえを首にかけて西山におもむくかたみに才をたゝかはしける。」またいふ、「此妻、人に語りしは、都の四方にて景物のよき所〳〵。月をみるには、聖護院殿の東北に松の三本ある丘。ちとりを聞には、五條のはしより下、夜深くなりては、花頂山のふもとよし。水鷄は、松むろの前。ひはりは、朱雀野とぞ。其すさか野と五條のなかれの下は、己もよくしりて、其言のたかはぬをおほゆ。聖護院殿のめくりもうちはれて、すべて月にはよ

き所なり。松のある所はさぞなんなほこゝろむべし。これ大橋か東山西山をあそびめくりての上にて知りたるならむか。

このゝち、一素、大橋相携へて、有馬の湯に浴す。大橋は、そこにて一素に乞ひ、みとりなす髪をそりおろして尼となり、正宗國師か法諱の一字をうけて、慧林といひぬ。此において、一素にもすゝめて、正宗國師に參せしめたりき。その所天をも道にすゝめたる大橋が心は、まことにありかたからずや。

閑田子また大橋の逸事を記す。いふ、白隱和尚、京師逗留の日は、つねにまうでしに、折〳〵冷泉舜静入道殿に出あひまゐらせしかば、和尚、此尼はもと島原の名妓なりと語られしほどに、入道殿、さらばむかしのなげぶしといへるものを覺へたらんうたひてきかせてんやとのぞみ給ひしに、それは、ふしはかせいとむつかしくて、今は久しくなりて、わすれたるがうへに、老こゐにては、こはぶりもまねびがたし。そのころの小うたと

いふものも、今のふりにはあらず。きこしめさんやと諷たりしも興ありしとなん。高僧名公、美人共に一堂の中に會し、互ひに畛域をすてゝ、遊戯唱咏す。まことに絶代の風流なるかな。

風流遊戯五十年、大橋つひに一素に先たちて身まかりぬ。一素すなはち佛護神照禪師を請して、大橋か爲めに燒香す。壇上たゝ觀音大士の像を掛けて、大橋の牌を安せす。禪師よて之を問ふ。一素のいはく、慧林はいはゆる應さに婦女の身をもて得度すへき者には卽ち婦女の身を現して爲めに說法する觀音大士の應現なるか故に、唯だ大士の像を掛けて慧林の牌を安せす。什麼のあやしみたまふことかあらむと。禪師これを聞き默して香を拈しきと云ふ。小桃妖艶滿面春風、畢竟是れ何の面目ぞ。點檢し見來れは、大士か隨緣化度の紅粉面なり。もし唯たによのつねの娼婦か禪を悅ひたるものと見れは、肩を交へて之を千里の外に失するものならむ。

なほ大橋か事を說くにつけて、決して遣る可らざるものあり。そは、大橋がいまだ島原にありたる時、妹とよひたる鷗洲なりとす。鷗洲もまた大橋と同しく流れの女なるが、その性いと聰慧にして、色藝第一に推し、俊逸の士にあらざれは、相親しむことを得ず。餞清調(餞屋といへる家號なるべし)といへる者のために贖はれて妾となりけるが故ありて髮をおろし、北山の寂光院に入りて尼となり、名を智雲といひ、清修にして、つゆ懈らず、その身を終りき。閑田子か記する所もともつばらなり。曰く、大橋か島原にありける日、妹とよひける遊女を、中京の富る人とりて、どあゝ所に隱しすゑたるを、其をとこの母きゝつけて、正妻むかふる障なりとて、諫るに、うけひかぬにはあらねと、たゆたひてほどへにけり。さらは今は彼かくれ人にあひていはんとてよひけれは、とみに其よる來たり。もとあそびなりけれは、いかに花やぎたらんとおもふに、見めかたちこそよけれ、有さまは、たゞなるよりもうちしめりて、着たるものなども、いと

あやなし。さて、すのこにふしめなりてついゐたれは、母、刀自、近くへよひけれと、猶はじめのまゝにてかしこみをる。刀自かう〳〵といへは、こたへはなくて、頭にかつきたるものをぬきて、かぶしの切たるに、一卷の文を添て出す。刀自いと腹くろき人にて、こは、我にものいはせしとてするわさか、あなにくなでう尼にならんする心はあらんとのゝしるを、かたへの人しつめて、まづ其かけるものを見給へといへば、やをらしづまりて取て見るに、もとのねさしをまをすは、いとつゝましけれと、父はあるやことなき御方につかへ侍りしものゝ、後には、ふて、朝夕のけふりもたへ〳〵なるうちに、おもくわすらひて、藥のあつかひもせんかたなきに、みつから身をうりて、あそひになり侍ぬ。さて、後、父も母もなくなりしかば、あはれ、たのもしき人もかな。此川竹のうきふしを遁れて尼になり、父母のため、みつからのためにも、涼しきみちのおこなひをのみし侍らんと、神にも佛にもねきつゝ、月日をわたりしに、此あるじの君、年比馴ま

ぬらすまゝに、この志をあはれ、おほして、わが身をあまたのこがねにかへてまづしばしとてなん、御あたり近かくすませ給へりき。さて、はやうほゐとけぬべきを、さすがに人のこゝろはかなきものにて、馴はまさらでとが、御情のほどのやるかたなく、今はと別參らせんことの惡しきに、けふはあすはとのそみて、おもはずに月さへ日さへ重り侍ぬ。かゝるよしをもゆめしらせたまはで、御まさめむかへ給ふ障なすものといかに〳〵にくしおぼしつらんと、御心くるしうこそ、こよひたいめ給らんと聞えさせ給ふにつきて、おもひさめてなん、かうかぶしをたち侍ぬるは、うきたることにはあらぬよしを見せ參らせんためなり。などやうに尙いとこまやかにて、歌もありければ、刀自よゝと泣きて、さる心あらんともしらで、はしたなめつることのはづかしうくやし。今はたゞわれをたのもしきものにおぼせいかにも〳〵思ひ給はんまゝにはからひてんと、ねもころに聞ゆ。さて、住ところは、京の内にてさるべき所をとい

ふに、いな、とつ國は水草清しとかきこゆれど、しるべなき遠き境は、さすがにゐ堪侍らじ。大原の山みち、むかしより世をいとふ人のすみ所とも、うけたまはれば、そこに身をおく斗の草の庵しつらひてたまへといへば、やかていふままにしたり。それより、おこなひをのみして、いとたゞ〳〵しくありへけるが、二とせ斗ありて、こゝちなやみけり。さりければ、刀自聞つけて、山ざとびんなしとて、おして近き所にうつしぬ。くすしむかへてあつかはすに、尼いなみてうけず。やう〳〵日を經ければ、刀自いかにせんと頭をかきてわふるに、あるものはからく、かれがたはれにてありし時のことも、大橋といふは、今は人のつまにて、それの所にありしものゝ心しりて、うたなどもよむ人なり。かれをよびて、いさめさせ給へと敎るに、いとよきことにて、やがてむかへていはす。尼うちゑみて、そよ、刀自君のあはれみかへりみ給のことは、山にも海にもたとしへなきまでに侍るを、唯あか姉の君ぞ、ことの心をよく知給ふへければ、おもふことき

こねんだはれにてありし時のこゝろつくし、いかにとおほすばづかしく惡しきこと、いひたつれは、地獄餓鬼などいふさかひもよそならすそれをのかるゝだにあるをかうほゐのまゝにおこなひして明しくらすなんあが身はたゝに今唯佛の國に生れたるおもひにぞされともとよりはかなきものにいはるゝ女の心のうへに、年もまだはたち比に侍るうへはなん、後いかならんとも、あが心をえしり侍らす。もしたゆむこゝろいできなんには、いかにあさましう口をしからまじかう心ちの清くあらんほとに、身まかりはやとおもひとりて侍れはなん、病のたひらぎぬべき藥は、さらにたうべじとおもひしめ侍れ。おほようの人は、きゝもわきたまはじと、今までは、かうもすゝこせしをなと、いとねもごろにときつゝ其こゝろのうたをもよみしに、さしもの女も、いさむべき言なくてやみつさて、いくほとなく終たりしが、露亂るゝけはひなく、めでたかりしとぞ。鴎洲が欲染中より超出して、清淨世界に遊ひたる、いとめてたく。

もまたたうとし。いはゆる高原陸地に蓮花を生せず、淤泥の中却てこの花を生するものか。臘月三十日にいたりては、蛾眉男子も手忙脚亂をまぬかれず。而かも鴎洲正念亂れず。これ深く得たる所あるにあらすむば能はさるなり。鴎洲かこときは、まことに大橋が妹とよひたるに孤負せすと云ふべし。

(二) 大智禪師と菊池氏の勤王

大機大用、羅籠を脱し、窠臼を出て、虎の驟るか如く、龍の奔るか如く、星馳せ電激し、天闕を轉し、地軸を斡らし、冲天の氣を負ひ、格外に提持し、卷舒擒縱、殺活自在の妙あるものは、我か蝕齒朗の道にあらすや。此を以て、往にしへ、武門の俊傑は、おほむねみな禪に參し、痛棒熱喝を喫して、その鐵石心腸を陶鑄したりしなり。

我曾て史を讀みて、南朝忠臣の中にて、二人の大居士を得たりき。一は、三

光國師および明極禪師における楠正成とし、一は大智禪師における菊池武時とす。正成が三光明極に參したることは、世のあまねく知る所なれど、武時の事に至りては、世或ひは知らざるもの多し。菊池氏の大智における武時以下三世に渉りて、その關係の尤も深きものあり。

洞上の僧史および菊池傳記等に依るに、大智禪師は、肥後國宇土郡長崎村の土民の子にして、幼名を滿仲といひ、甫めて、七歳にして、後鳥羽天皇の皇子にして、永平道元禪師の法を嗣きたる寒巖禪師を河尻の大梁山に拜して薙染し、瑩山國師に加州の大乘寺に參して、一大事を明め、また臨濟の大應國師に鎌倉の巨福山に參し、のち更に元に遊ひて、天目の中峯禪師にも相見したりき。始めは、加州の加內莊に住みて獅子山を開き、後に肥後に歸りて、菊池郡穴鄕班蛇口山に鳳儀山聖護寺を開きて住し、もはら枯淡を甘なひて、二十餘年の久しき、一たびも山を下ることなかりきと云ふ、偶あり。いはく、

其一

一抹輕煙遠近山。　展成淡墨畫圖看。　目前分外清幽意。
不是道人俱話難。

其二

截斷人間是與非。　白雲深處掩柴扉。　當軒栽竹別無意。
祇待鳳凰來宿時。

其三

名韁利鎖留不住。　晦跡烟霞水石中。　折脚鐺兒煎野菜。
住山自効古人風。

其四

草屋單丁二十年。　未持一鉢望人煙。　千林果落携籃拾。
食罷溪邊枕石眠。

其五

萬象之中獨露身。　更於何處著根塵。　回首猶倚枯藤立。
人見山兮山見人。

其六

焚香獨坐長松下。　風吹寒露濕禪衣。　有時定起下双禪。
瓶没五更殘月歸。

其七

空林卓錫卜幽栖。　冷淡家風實可悲。　荷葉滿地無線補。
白雲爲我坐禪衣。

其八

終日搬柴運水中。　分明顯露主人公。　三千日月覩成敗。
坐斷須彌第一峰。

武時の大智禪師と相知りたるは、實にこの鳳儀山居の時なりき。武時、大智の高德を欽し、時々山居を訪ひて、心要を叩き、その道契もとも深し。菊

池傳記に、二人の關係を記して曰く、

菊池武房が嫡子彌四郎隆盛、父に先て早世す。故に其子時隆、祖父武房が家を嗣けるに、叔父六郎武經、家督を論し、鎌倉に趣き、時隆と對決に及ひ、武本、武經負て他邦に逐電す。時隆、家を相續すといへ共、十七歳にて早世しける故、其弟次郎武時、時隆が家を嗣ぐ。このとき、國中の者、武時をにくみ、所々において戰ふに、武時討負て、菊池郡鳳儀山聖護禪寺の住持大智和尚を輕む。大智は、乘て武時と睦しかりければ、ひそかに寺にかくし置、上洛して奏聞し、本領安堵の綸旨を賜り下向しける。故、武時、菊池に還住し、背く者をうち從へ、肥後を過半領知し、肥後守と號し、從五位下に任す。後に薙髮して眞空淑阿と號せり。

けだし、大智禪師、早くも武時が氣宇の世に勝れて、文武の材あり、その王に勤め、また民に勤むるに足るものあるを知りて、之を助け之を導ひきたるものなるを疑はざるなり。

武時か肥後を平くるに及ひて、玉名郡石貫村に地を相して一刹を建て、紫陽山廣福寺と號し、大智禪師を請して開榛とし、皇室の無窮を祝し、且つ佛心宗を傳ふるの道場となしき。その寄進狀なるものを見れは、武時か本旨のある所を知るに餘りあらむ。曰く、

奉寄進

肥後國玉名郡石貫內

紫陽山廣福寺伽藍界畧

右奉當伽藍地并山野寄進元者

大智上人、去正中元年甲子、從宋土歸朝、占擇閑寂之地、早擲俗塵名利之境、可傳靈山少林永平之古風於盡未來際、志願、堅固之間、寂阿不勝感嘆隨喜之至、以當山、限永代、所奉寄附大智上人也、末代子孫、號本寺檀那、恣已之私情、以住持職、如恩給付、追陪位勢之輩、破壞正法之事、定有之歟、仍申成當山於公家御勅願寺、奉祈聖朝天長地久、兼當寺開山大智上人、法

乳之子孫、相繼住持職、可傳心燈於龍華之晨者也、縱雖爲本寺檀那所當山被定置文之內、五箇條制法之外者、住持職山野并檢斷大小之事、永切不可相成綺、後代子孫若背寂阿寄進狀之旨者、爲三寶敵對及不孝之子孫之上者、永遠三世常住當國鎭守阿蘇大明神并遙拜大明神冥鑑、可失家門之運命、若守斯寄進狀之旨、以清淨信心、守護正法、則密蒙三寶諸天之護念、子々孫々、全弓箭之家、永可奉守國家之寶祚、因寂阿自出身血、合朱押手印於寄進狀之面、以所曉喩、後代子孫者也、永爲奉護持正法、仍所奉寄進狀如件、

菊池肥後守寂阿手印判

武時は、さすがに大智禪師の鉗鎚を受けたるほどありて、能く忠義の心を守り、榮辱をもてそか心を動さす、士を養ひ民を撫し、一意、王事に勤めたりき。わきて、臨終の一段、最もその人を見るべし。菊池傳記に記して曰く、

元弘三年三月十三日、菊池を發して、英時か籠たる博多の城に押寄る。既に柳田社の前を打過けるに、いかなる故にか有けん、寂阿か馬足をとゝめゆかさりけれは、寂阿大に怒て、介者は拜せす、まして物祭する邪神に、我なんぞ下馬せんやと、箭取て打つかひ、

武士のやたけ心の一筋に
思ひきるとは神はしらすや

と詠して、神殿の扉をはたと射たりけれは、馬ゆくこともとの如し。英時か方には、思設たる事なる故、城戸を開て切て出、双方入みたれ戰ふに、菊池方うち勝て、城兵二百餘人を討捕、英時も既に危く見えしに、少貳妙惠、大友具鑑、八千餘騎にて英時を援。寂阿、今は利を得かたく思ひ、武重を呼て、汝は是より肥後にかへり、死殘たる郎從をあつめ、再義兵を揚へしといひけれは、武重仰とも覺候はす、兎も角も安否を共に決し申べしとて、中〳〵落へき躰に見えさりしかは、寂阿、大にいかつて、

汝は日比の思慮に拔群相違したる返答かな。およそ小信を守て大義を忘るゝは、良將雄士の辱る所なり。我は朝家の爲に命を爰にとゝむ。汝は爰を遁れて、節にあたつて命を奉るべし。遲速ありといへとも、いづれか死をまぬかれんや。時移るに、とく〳〵といさめしかは、武重は、離別の涙に袖を濡しなから、父か遺訓にしたかつて、葉室吉宗以下五十騎はかりを引分て、肥後國に落行は、寂阿、今はおもふ事なしとて、葉室高善、賴隆、隆寂赤星宗思等百騎はかりを左右にたて、一文字に驅入、散々に打破り、英時か後見齋藤日向次郎、西郷隼人、三科丹後守、小池五郎、齋田又三郎、武田八郎以下數十人を討捕といへとも、少貳、大友が大勢、後より取圍て、雨のふることく射ける箭に、寂阿をはじめ、一族の郎從悉く手負けれは、寂阿、多勢を驅拔てみるに、八十騎はうたれて、殘兵纔に二十騎にぞ成にける、それも深手淺手五ヶ所七ヶ所かうふらぬはなし。寂阿、いまは是までぞ、かた〳〵、斯深手餘多所々かうふり、身躰

自由ならねは、本意を達せんこと叶かたし。一人なり共、敵をうたんと思ふぞや。いざ敵と刺違へんとて、一度に敵陣に驅入、二十騎の者とも、向ふ敵と引くみ〳〵、落重りさしちかへてぞ死にける。

何そその勇にして烈なるや、その武重を故郷に還し、再ひ殘黨を糾合して義兵を擧けよと遺囑したるは、恰かも楠正成か正行を河内に還したると、その符を合はせたるが如し。千載の下、人をして感激して已まさらしむ。是れ多年大智の毒手に接して兩頭俱に截斷したるにあらずむは、豈に能く此の如くならむや。

武時すでに死し、長子武重、その職をつきて肥後守たり。武重の大智禪師を崇敬すること、また父の如し。洞上に傳ふるところの十二時法語と稱するものは、實に大智禪師が武重に示したるものなりき。また大智偈頌に、雪中、寂山に示すと題する偈五首あり。寂山は、武重の居士號なり。偈に云ふ、

其一

一夜庭前三尺雪。　寒威徹骨立人稀。　少林斷臂得髓旨。
只許拚身來者知。

其二

虛空粉碎化微塵。　大地平沈不見人。　枯木乍開花一點。
喚回空刼已前春。

其三

珠簾捲起水晶宮。　冷坐洞然明白中。　半夜日輪當午照。
從前一色却成空。

其四

大地削成白象牙。　普賢毛孔出山河。　重々示現神通力。
粉碎虛空雨雜花。

其五

白銀世界玻璃地。　一色明邊絶點埃。　更把虚空粉碎看。

不崩枝上放花開。

茫々出得不出得、只許拚身來者知。見すや、往にしへ、老胡が髓を得むか爲めに、少林の雪に坐して臂を斷ちたるを。汝もし不可得安心を得むと欲りせは、須らく先つ大死一番して來れと示す。大智か老婆徹悟なるを見るなり。

大智の武畫におけるや、唯たに宗門向上の事のみならす、軍國の事においてもまた教示する所太た多かりしものゝ如し。紫陽山に藏する所の大智の手翰は這般の消息を知ることを得へし。曰く

寺の御奉行の事

當寺正法盡未來際立や立すやの一大事にて候間、藏主禪古兩僧をもて申候。

一けふあす、かやうの事申べしとは、ゆめ〳〵思ひよらす候所に、思ひ

の外に、この寺燒失いてきたりてやけ候ぬ。このきさみ、兩三年立て候。遙拜宮のみね、こしの野やかれ候て、又河床へつゝきの野、殊に寺の北にあたりて高候峰寺をまほる大吉の山にて候を燒て候程に、あまり心のやるせも候はて、心中に佛祖三寶に知見證明しめしめせとまて、誓願祈念申て、このまきものを書てたまはらせ候。

一山野の失火の事、向後御いましめの事書あり度候。左もおほしめされ候はゝ、三寶の御事にて候間、御いたはしく候得共、奉行人少々めし具し候て、わざと山に御入候は、是にて文章のていをも、未來佛法の立候やうに御定候は、大法の外護にふかくたのみ可申候。

一神代の如法道場所、前々も火難により候てやけ候ぬ。この事を犬王丸が母にこの兩三年申候へとも、聞入れす候。それにつき候て、寺にむけて三ヶ年寺領をおさへとり候事をはしめて、散々のふるまひ入見參可申候。公方より御はからひなくては、如法經をはいつれの所にて

も候へ、他國にうつすへき體に成て候。先年いつぞや、高橋兵庫してわさと御文にて承、又わさとはさま殿を高來にこしたてまつられ候て、事を尋られ候し御こゝろさしは、いまにわすれ申さす候へとも、其時は犬王丸はいまたいとけなく候し程に、とがは候はす、母が日本一のえせものにて、さん〳〵の式をふるまひ候し間、犬王にとかをかけしと存候て、はさま殿を事なき體にて、かへしたてまつりて候。今は犬王も成人し候ぬ。まことに公方より正直の御はからひ候を、そむき候はすは、罪科までは申ましく候。如法經の御おこなはれ候はゝ、法界の衆生をみちひくやうに御はからひ有たく覺候。

一、觀喜殿、豊後よりひかれ候しに、そのからとの、所々の難所をきりふさき候はゝ、飛鳥ならては、人のとをるへきやうも候はすときこしめされ候はん。この寺をふかく御賴候に、大般若を轉讀候しとき、御布施のために、高來一郡におゐて、惡盜賊百人を扶持して、一郡のわつらひに

もならす、又君の御大事にも立て、弓矢の道にさるものありと人にもしられて候はんする者の父うち死、子うち死したる者にても候へ、御方に參り候はゝ、闕所有るへからす。此一段を御布施候へと申て候しに、なのめならす御悅候て、御領掌候。恐身啓白して、信心をこらして大般若を讀誦、五ヶ日の中に、觀喜殿歸國候て、再ひ御目にかゝりて御悅候しこと、不思議の靈驗にて候歟。よもおほしめしわすれ候はじ。しかのみならす、阿蘇第一のせつ所をきりふさきで、凡夫のとをるましきやうに城をこしらへて候しを、菊地殿をはしめて、諸大名の手よりもやふらす、迫間殿うちやふつて、通られ候て、九州にかたき御身むかしよりなき程の名をあけられ候て、觀喜殿を事故なく通されて候し思出候へは、併大般若の十六善神の御力をあらはされ候事、いかてか御報謝なくては候へき。

其時、弓箭とりて、人にけに〳〵しく御いはれて候し人々の名字の中

にて候、ちくはやかみこれか領家年貢をさんなくせめとられ、ちくはか當知行すへき所を、高橋兵庫やう〳〵まきらはして、今までかくしつきさる事、御ためにあまりいたはしく存候。

一いかさま生々世々佛法の中にして、緣をふかくむすひ候へはこそ、今世にても外護とならせ給、あまつさへ師弟子の緣をむすひ申て候事、一世の緣とはおほしめさるまじく候。

今五ヶ條をかきて申御事、聊も正直の天理にそむく事は、一事も候はす。仍手印押て申候。

正平十九年二月廿三日　　大智

又大般若御布施の事は、迫間殿に政道わたされぬはるかの以前にて候。

御事一人ならては、ふつとさたまりぬとは覺す。以上。

此書によりて所謂肥後騷動の事情を窺ふことを得へし。武重か遂に肥

筑前州の大守となりて、王事に盡悴したるもの、實に大智禪師が力なり。」武時、武重の父子が大智禪師に歸依して、その慈教をうけたること、此の如し。故を以て、一門の士また多く大智禪師を崇敬したるか如し。武重が弟なる木野對馬守武茂が鳳儀山聖護寺に納めたる神文にいはく、

敬奉對三世常住一切三寶殊鳳儀山聖護寺當國鎮守阿蘇大明神御寶前發願起請文事。

一武茂、弓箭の家にうまれて朝家につかへたてまつる身たる間、天道に應し正直の理をもつて家名をあけ、朝恩に浴し、身をたてんことは、三寶の御ゆるされをかうふるへく候。其外、私の名聞利欲に義を忘れ耻をかへりみすへつらへる當世武士の心をなかくはなるへく候。

一私欲の爲めあるひは親疎によりて、五常の道にそむくへからず候。

一公私出仕の外、私のましはりに、名聞榮花を嗜み好むへからず。當世不實者のふるまひをなし、文武には、つれて、國家のつゐえたらんこと

をかたく停止す。

一舍兄肥後守子々孫々までいましめを定め置候趣を、武茂も堅く相守り、そむかさるやうにねかひ候。

此趣違背においては、日本の諸神の御罰をかうふるべく候。

延元三年八月十五日　　藤原朝臣武茂

池一門の士が齊しく三寶に歸依し、王事の爲めに身を献げたるを見る。大智禪師か感化の力もまた甚た大なりといふへきなり。

然るに、武重、中道にして病にかゝり、空しく勤王の志を齎らし歿し、その次弟武士、家を相續して肥後守と號す。按するに、菊池系圖には、この武士、をもて、武重か子とすといへとも、實は弟にして、兄の養子となりたるものゝ如し。武重、武光の母なる比丘尼慈春か手書に、

かしこまつて申入候。ひごの守たけしけのめいをうけて、ようしたけひとめしかへされ候さた大きに候はゝほうぎ(鳳儀か)のほうでう(方

丈か)へかへしんすべく候。

とあるによりても明かなり。そは、とにまれ、武士もまた父祖の志をつぎて、三寶に歸依したりき。鳳儀山に納めたる誓紙に云ふ、

敬奉對三世常住十方三寶殊若鳳儀山七佛五十餘代佛祖御前誓申發願事。

一守五常天道全武略之家奉爲君持節可仕朝家候。

一幼歳繼家之間不明天道正理於事違武重遺命頗多矣仍爲謝一身之咎雖爲頭目髓腦於爲法爲師者不可本懷候。

一於眞俗二諦不敢違師命一心護持正法可令報謝武重厚恩候若此條々於違變者直罷蒙天罰永失弓箭之家可申候仍誓文如件。

興國三年壬午三月十七日　　藤原武士

然かはあれと、武士、質もと蒲柳にして、軍國の事に任ゆること能はす、職に居ること、およそ二年はかりにして、自ら退き、大智禪師に就て、その意

を八代高田御所に達しき。その書に曰く、

武士天性愚昧。不辨天道之天理。是以。奉爲君爲家。若於可爲後代之難振廻有之者。任武重遺言之旨。被讓與所領。不殘一所。於兄弟一族之中。撰可爲仕朝器用之者。可令嗣當家給候。以此旨宜有御披露候。武士恐惶謹言。

興國五季正月十一日　　藤原武士

進上　鳳儀山侍者中

目らそか身の軍國に任へすして、遂に父祖が業を失墜せむことを憂ひて、その職を退きたるなり。その志また憐れむべきなり。

武士すでに家を捨て、大智禪師を禮して薙染し、號を祖禪といひぬ。我かつて洞上の僧史を捜るに、祖禪の事を記せす。菊地傳記に云ふ、

武士、甚た佛法を尊み、世事を厭ひ、隱遁の志あり。常に詩を賦し歌を詠するをもつてたのしみとす。あるとき、大智禪師を請して、四方山の雜談ともの次に、大智いはく、足下は短命の相あり。出家せは長命ならん

と有りしに、武士應諾し、領知を叔父武光に讓り、剃髮し祖禪と號し、諸國を修行し、本國に歸り、菊池郡寺尾野の櫻を見て、よめる歌に、

袖ふれし花もむかしをわすれすは
　　我墨染をあはれとはみよ

其後、いつち行けん、をはる所をしらさりける。

記する所、僅かに此にとゝまるをもて、祖禪が行業の詳なるを知ることは能はすといへとも、とにかく、出家の大本懷を遂けたる大丈夫の漢なりしを疑はざるなり。

武士、家をすて、乙阿迦丸といへる者、職をつきて肥後守たり。また誓狀を紫陽山に納む、その文に曰く、

敬奉對三世常住十方三寶殊者七佛五十餘代佛祖幷天龍護法善神御前誓申發願條々。

一隨分外順五常天理內行大乘心法爲大法內外護可奉護持佛祖正法

候。

一繼武重武士家之間於文武二道仰可守正直天命候。

一奉布施身命於佛祖正法之間假令雖摧頭目髓腦發願之後不可奉敢違背師命候此願若破候はゝ直罷蒙三寶龍天護法善神殊若當國鎮守阿蘇大明神御罰永可失弓箭冥加候。

興國三年八月七日

乙阿迦丸

乙阿迦丸もまた能く父祖歷代の心をもて心とし、ふかく三寶に歸依して、大智禪師を仰きて師父となし、一身を王事に任したるを見るなり。さて武時か始めて身を捧げ家を擧けて王事に勤め、これより武重、武士を經て乙阿迦丸にいたるまで四世およそ四十餘年僅かに肥後一國の守護をもて西陲の賊に當り、一家一門協心合力いまたかつて利害をもてその節を渝へすしば〳〵艱苦に逢ふて屈せす、一意王事に勤むその忠義大節楠氏と共に傳へて汗青を照破するに足るものあり是れ實に

大智禪師か教化に依つて然るにあらすと謂はむや。竟來大智禪師の菊池氏におけるは應身の菩薩互ひに因地の誓願力に乘して此に能所の相を現はし實祚を擁護して大義を千萬祀に扶植するの大權方便たるのみ。

(三) 山鹿素行と大石良雄

山鹿甚五左衛門素行は天挺の人豪なり。文においては林羅山門下出藍の道學先生として武にたいては山鹿流兵學の開祖として常に一千人餘の弟子を擁し、一世の士林を聳動したりき。然るに素行唯た紫陽の學のみを守るをもて自ら滿足せす、五山の耆宿および黃檗の普照國師に依て別傳の心要を叩きぬ。播州赤穗城に幽居中自ら記して曰く、

我等事幼少より壯年迄專程子朱子の學筋を勤依之其頃我等述作の書は皆程朱の學の筋迄に候中頃老子莊子を好玄々虛無の沙汰を存

候。此時分は、別て佛法を貴候て、諸五山の名知識に逢、參學悟道を樂、隙元禪師へ迄、令相看侯。我等不器用故に候哉、程子の學を仕候ては、持敬靜坐の工夫に陷候て、人品消默に罷成候樣に覺候。朱子學よりは老莊禪の作法は、活達自由に候て、心性の作用、天地一枚の妙用高く、相成樣に被存候て、何事本は自性の用所を以仕候故、滯所無之乾坤打破仕候ても、萬代不變の一理は、惺々洒落たる所無疑存候。

果然々々、素行、文武經世の業に精通して、天下の木鐸となり、順境に處して喜はず、逆境に處して悲まず、富貴を視ること錦覆陷穽の如く、逆遇に逢ふて、熙春麗日の如し。是れ實に幾多老古錐の痛棒熱喝に會ふて、その心腸を鑄陶したるか故にあらずや。

素行の赤穗にあるや、淺野侯の素行を待つこと、恰かも師父のごとく、その禮太た厚し。素行、感激して曰く、今や幽囚にありて、侯か知遇に酬ゆるに由なし。然りと雖も、一藩の子弟を敎へ、剜心臂腹、頗る我か精力を用ひ

たり。藩國一且大事到來せは、幾多の山鹿甚五左衛門躍出せんと。蓋し、原總右衛門元辰、大石內藏助良雄、磯貝十介等、その門の俊傑なり。この三士の中にも、大石良雄は、門下の高足にして、文武共に脩めたる士なるか、亦た厚く心を禪要に寄せ、常に網干(あはし)龍門寺に上つて、正眼國師の鉗鎚を受けたりき。良雄自ら國師より受けたる硯に題して曰く

予嘗參禪於盤珪和尙。師曰。本來不生。予不會焉。今春。聊有識其趣。直到和尙而學焉。師曰。是々。于時見師之傍一之硯。師曰。是則西行法師自作之石也。予曰。不然。師曰。卽今何人作。予曰。西行未生已前。某所作也。師微笑曰。出於爾者。須返爾焉。以贈予焉。予不辭拜受歸矣。于時元祿六春二月日。大石氏某受用印

未生已前の一句、獅子王の一吼の如し。その境界見地の尋常ならざるを看取す。宜へなるかな、良雄、藩國の危に逢ふて、從容閑雅、少しも騷かず、同志を糾合して、能く先君の志を成し、忠義氣節を千萬祀に扶植す。是れ實

に皮肉を素行に得て、骨髓を正眼に得たるの致す所なり。

素行、道學を羅山に受けて、遂に自ら滿足せすして、普照國師に相見し、良雄、道學を仁齋に受けて、また之に滿足せすして、正眼國師に參す。その向上の事を知らむか爲めに、進んで禪に歸したるにいたりては、恰かも符節を合したるか如し。這の師にして、這の弟子ありといふべし。

世人倘し能く素行、良雄二人の肝胆心腸を徹見することを得たらば、偏に許す、世法、佛法、共に成就したることを。

(四) 賣茶翁

僧が僧にあらず、道か道にあらず、儒か儒にあらず、世執法執を脱却して、洒落不礙、高天厚地を一茶盞の中に納めて、物外に徜徉し、隨處に半升の鍋内に十虛空を煮て、海内大雅の士を醉はしめたるものは、實にわが高游外居士賣茶翁にあらずや。

伊藤若冲かつて翁のために其の肖影を寫すや、翁みづから題していはく

厩世不知世學禪不會禪但將一擔具茶茗到處煎到處煎分無人買空擁提籃坐溪邊噫何物好事謾描出一任天下人粲然。

その胸襟の洒落なる想ふべきなり。近代禪門の耆宿その人少からざれども、余もとも翁の人と爲りを悅ぶ。此に聊か試みにそが一生の游戯三昧を記さむ。

浪華の篆刻家阿部纖洲の良山堂茶話に依れば、翁は延寶三年乙卯五月十六日を以て肥前の蓮池に生れたりといふ。實に獨立禪師の示寂の後三年、鉞眼禪師の示寂前九年なりとす。また萬年山蕉中和尚の物せる生傳に依るに、翁姓は柴山氏、年はじめて十一にして龍津の化霖和尚を禮して出家し、元昭と名け月海と號す。參詢の後また化霖に龍津に侍し、因て寺事を監すること十四年、化霖沒して後、法弟大潮を擧げて之に主た

らしめ、遂に去りて京に上り、始めてその樂託の性を肆ることを得たり。而して肥前の法は、彊を出る者必らず劵を以てす。釋氏の四方に雲游する者といへども十年ごとに必らず歸りて更に籌許を得ざるべからず、翁その絮煩しきに堪えず、七十の時、國に歸りて乞ふて僧を罷め、名を肥人の官游して京に在る者に隸して十年の限を免れむことを請ふ。有司もまた固より翁の人と爲りを信ずるを以て、遂に其が願の如くす。翁大に怡び、これより自ら高を姓とし遊外居士と號し、再び去て京に上りて草庵を岡崎に結びて老を養ひ、寶曆十三年癸未七月十六日を以て方廣寺南の幻々庵に蛻す、世壽八十又九、坐夏七十又八なりといふ。

稽ふに翁いはけなき時より岐嶷にして、稠人と比せざりしものゝ如し。嘗て化霖に從ふて黄檗山に詣でゝ獨湛老人に相見す。老人は師ち化霖の本師なり。一日、老人、翁を方丈に召して賜ふに偈を以てすと。老人その顯異なるを知りて深く望を屬するにあらざれは、爭かで偈を小兒に與

ふるの理りあらむや

翁すでに親を辭し家をいで、髮をそりおろして禪門に入りてより、衣線下の一大事を明めむがために、命を懸絲の危きに瀕して辛錬苦修したりき。その二十二歳の時たまゝ〳〵痢を病みて困憊し、自ら處すること能はざるに、遊方の志を發し、腰包頂笠、奮て龍津を去りゆく〳〵分衛して奥州に抵り、萬壽の月耕和尚に見えて挂搭し、數年の後去て遍ねく臨濟、曹洞二派の耆碩を叩き、また潛堂律師に依りて毘尼の學をうけたりき。或ひは單孤居止、東西を恒にせず、身には蓄ふる所なく、壹ら斯道をもて其か任となす。嘗て筑の雷山の頂に上りて草を結び、飢來りては麥屑を食ひ、渴來りては谷間の水を掬びて呑み、晝夜工夫して一夏を過したりきといふ。その精苦おほむね此の如し。翁の法のために碎勵すること、洵に傳灯中の古尊宿にも愧ぢずといふべし。世に翁の語錄を傳へざるを以てその學得底を窺ふに由なしといへども、必らずや深く造詣する所

あ、り、し、な、ら、む。

如、上、の、ご、と、く、翁、は、恁、麼、に、辛、苦、し、而、して、人、天、に、接、化、して、缺、齒、刮、の、家、風、を、宣、揚、す、る、こ、と、を、倣、さ、ず、却、り、て、寺、をいで、茶、を、賣、り、て、飢、を、療、す。その、心、事、頗、る、怪、しむ、べ、き、には、似、たれ、ど、こ、はまたく、深、意、の、存、す、る、あ、り、て、然、る、なり。翁、よ、の、つ、ね、語、て、曰、く、

古者。世奇首座辭二龍門分座一也。曰。是猶二金針刺一眼邪。毫髮如差。時則破矣。不如生々居二學地一而自煉也。予每以此自警。以爲苟能有一拳頭足一以酋應物機一而出爲人可矣。其或未然。脩二飾兩裘學解一抗二顏稱二宗匠一。吾所恥也。

嗚呼、翁は、洵に、大、法、を、重、んず、る、の、道、人、なる、かな。今、の、世、の、宗、匠、といひ、師、家、と、稱、す、る、者、は、則、ち、しから、ず、わづかに、一、二、の、古、則、を、提、撕、し、二、三、の、語、錄、を、讀、めば、直、ち、に、下、駄、を、穿、いて、林、際、洞、山、の、腹、の、中、に、入、るごとき、こと、をいひ、警、策、を、執、て、禪、堂、內、に、踞、して、胡、喝、亂、棒、を、行、し、鼻、孔、遼、天、雲、居、の、羅、漢、たる、もの、比、々、みな、然、りとす。而して、翁は、自、ら、謙、して、居、らず、竟、來、法、を、

重、んず、る、爲、めの、み。かつ、翁、の、言、を、草、々、に、看、過、す、べ、からざ、る、もの、あり。當、時、昇、平、日、久、しく、禪、風、地、に、墜、ち、いよ〳〵、越、りていよ〳〵、下、れ、り、き、當、時、に、大、圓、寶、鑑、國、師、の、嫡、孫、にして、至、道、庵、無、難、禪、師、が、手、度、の、兒、たる、正、受、老、人、あり、といへ、ど、も、信、の、飯、山、に、韜、跡、して、出、で、ず、正、宗、國、師、白、隱、和、尙、は、なほ、東、西、に、參、詢、して、いまだ、法、幢、を、建、てられざる、時、なりしかば、天、下、の、禪、道、見、るに、足、るもの、なかりき、固、より、衆、を、領、する、人、なきにあらねど、多、く、は、未、だ、正、眼、を、開、かざる、徒、なりしならむ。されば、翁、はその、學、人、を、誤、らむ、と、を、怕、れて、此、の、言、をなし、また、自、ら、身、をもて、當、時、の、宗、匠、と、稱、する、輩、を、警、められたるにあらざるなきを、得、むや。

翁又いふ、

釋氏之處世。命之正邪。心也非二迹也一。夫張二夸僧伽之德一。勞二人信施一。非二予自善者之志一也。

洞に、人、の、信、施、は、一、粒、といへ、ど、も、その、重、きこと、須、彌、山、のごとし。翁、が、警、

閑に世の供養をうくるを肯んぜざりしを見ても、その心の高潔なるを窺ふに餘りあらむ。

或はいはく、翁が學地に居りて自ら煉るは則ち喜し。然はあれど、つゐに寺をいで僧を罷むるに至ては、亦た甚たしからずやと。嗟乎、這の間の消息、俗士と共に語るべからず。應庵曇華古佛いはずや、衲僧家は草鞋を着けて住院すべしと。家をいづるの難きにあらず、寺をいづる實に難し。その龍津を去て、蚖蛇の窟を戀ふか如くならざりしは、翁の翁たるゆゑんなり。

翁いはく、

吾貧無以肉爲老無以妻爲葛巾野服賣茶之生有適焉。

遂に通仙亭を京の第二橋に構へ、はじめて茶を賣て生となしぬ。こはいつの頃なりしかは、たしかには知りがたけれど、化霖和尚示寂の後なりといへば、想ふに享保中にして翁の年五十左右の時ならむか。亭の樣は

如何なりしか、今それを知るに由なけれど、結構すべて簡樸を主としたる小亭なりしならむ。門聯には、

亭開板海內君子茶熟驅人間睡魔。

の十四字を題し、また茶席に題して、いはく、

茶錢は黃金百鎰より半文錢まではくれ次第、たゞのみも勝手、たゞよりはまけまをさず。

遠慮さへおあしで渡る難波江の
流れを汲める老のわが見ぞ

席の側に錢筒を掛け、隨意に茶錢を投せしむ。錢筒に題したる偈多し。

落魄西來客。道貧身亦窮。賣茶聊博飯。活計在筒中。

又

煎茶日々起松風。醒覺人間仙路通。要識盧仝眞妙旨。傾甕先入箇錢筒。

又

隨處開茶店。一錢是一錢。生涯唯箇裏。飢飽任天然。

通仙亭に於て用ふる所の茶具およそ十八種あり、みな當時文士あるは名流の題する所なり。此に其の文を錄す

爐龕扉面

僊窠。(桑爲溪)

同裏面

置爐堪謎炭。換銚好烹茶。荷是琅玕德。仙窠到處誇。(大潮和尚)

龕背

虛括實蠹。同爾消息。茶籠之施。滾々無窩。(紫石)

都籃

泉石良友。(百拙)

注子

木生於水。反水之苞。豈伐其滿。持而弗有。彼罄匪恥。汚我無受。捨舊取新。清

潔是守。(宇子新)

烏檀

八稜不用明。含汚自暗跡。質素元天性。莫言玄尙白。(君山)

吹管

大其小。顯其微。汝其勇於爲者邪。(蕉中和尙)

錢筒

寒拾去後。久埋空山。今吾得爾。庸養衰殘。所命雖異。受用一般。(翁)

淬盂

遺芳(蕉中和尙)

炭櫃

擊破黑頑。作光明藏。(翁)

瓦爐

陸氏流風。同工異曲。晨焉夕焉。輔吾煢獨。(翁)

爐圍

炎々者德。豈曰中熱。君子克畜。外虛內實。弗衛必散。弗保必滅。爰保爰衛。其發有烈。(蕉中)

提藍

每回風景。(古心)

同蓋子

鶯啼花爭發。山碧雲半橫。故人明月過。茶水晴雪清。此遊誰能解。逍遙羽衣輕。(三山)

注子

去濁抱清。縱其灑落。大盈若冲。君子所酌。(蕉中)

擔子

洪厓肩上。鹿老神通。敲寒溪月。擔落花風。(沙浦南樵)

吹管

向下一竅。威風反高。等閑觸著。煙却眉目。(公翁)

分盈

實而若虛。隨處無漏。(悟心)

建水

納汚(終南)

茶舖招牌

裘若開舖延過客。乞錢博飯養衰殘。(公翁)

これらの茶具は翁身まかりて後、茶を嗜む士らが、爭ひ求め、恰かも洪壁を得るがごとくなりき。而して多くは浪華の蒹葭堂に落ちたりといふ。

翁、通仙亭を結びてより、凡春は東山の櫻花海の如き朝、秋は通天橋の楓錦なす夕、さては大佛の燕子花、廣臺寺の胡枝花、そのをり〳〵に、眺矚をかしき處を求めて、自ら茶具を荷ひて至り、席を設けて客を待つ。洛下風流の徒よろこびて、その冉々として擧る茶煙をしたふて集ふ。されば、い

く、程もなく、賣茶の名、普ねく世に聞え、苟くも風流を談ずる者は、游外居士を稱說せざるはなかりき。木村巽齋は博雅の士なり、もとも翁の人と爲りを怡び、畫像を茶室に掛けて茶を友朋に施したりきといふ。その兼葭堂雜錄に外池義府の撰みたる賣茶翁畫像記一篇あり。田中某の如きは、その家中において別に一軒を開きて花月庵と號し、翁の肖像を奉じ、例に毎月十六日(翁の忌日)を以て施茶の莚を開きたりき。また翁の遺衣を得てその墨蹟を裝褫し以て珍藏したりといふ、事は良山堂茶話に見へたり。

豐後の儒田能村竹田は、南宗畫においては、近代の泰斗なるが、亦た頗る茶事を嗜みて、翁の人と爲りを慕ひ、若冲の圖する所の翁の像に臨し、かつ翁自題の韻を次で贊したりき。こはその自畫題語の中に見えたり。その他、當時の文士韻士が競ふて詩あるは歌を寄せたる者亡慮百餘人なりしといふを見ても、その世に欽嚮されたるを知るべきなり。

されば禪衲の中にも、翁を慕ふのあまりに其の茶事を倣ふ者ありき。究竟賣茶のことたる、翁の知き人にして始めて作すべきものにて、謾りに學ぶべきにあらず、翁よて偈を打して之を警む曰く、

太傅面前飜却去。千年舊案舉來新。腕頭無力全扶起。謾叫煎茶莫失眞。

そも翁は茶を賣りて飢を樂むといへども、その志茶にあらず、實に茶を名とするなり。そは平生綿密の行は人の省せざるのみ。晩に岡崎に在りし時その茶具仙窠を取て丙丁兒に付しぬ。事は寶曆五年乙亥九月四日にて翁の年八十一の時なりき、此れより後復た茶を煮ざりきといふ、仙窠燒却の語に曰く、

我從來孤貧。無地無錐。汝佐輔吾曾有年。或伴春山秋水。或露松下竹陰。以故飯錢無缺。保得八十餘歲。今已老邁。無力于用汝。北斗藏身。將終天年。却後或辱世俗之手。於汝恐有遺恨。是以賞汝以火聚三昧。直下向火焰裡轉身去。轉身一句旦如何。良久云。刼火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。便付丙

丁。後世そのつひに世俗の手に落ちて紛々たらむことを慮り、一炬に燒了す。翁の手段決して宗易居士の下にあらざるなり。

魯察子いはく、翁蓋隱干茶者乎。と。余は卽ちいへらく、翁は茶事を以て佛事を作すのみ。往にしへ文詞を以て佛事を作したる者あり、宋の蘇東坡、明の宋學士の如きこれなり。その茶を以て佛事を作したる者は、余、珠光、宗易、宗且と翁とにおいてのみ之を見る。

翁偶頌を能くす、世に傳ふに所一卷あり、此に數首を抄す。

賣茶節二

自覺疎狂逆世間。陸沉城市恣痴頑。雖言形影唯相吊。十二先生伴我閑。

五臺拈起玻瓈盞。塞斷口門味太奇。莫道南方無這箇。通仙亭上也無虧。

歳晚偶成

四序流行旋火輪。箇中自有不遷春。叡山倒玉千尋雪。獨露毘盧淸淨身。

人間歳月轉車輪。洞裡乾坤刧外春。埋首市塵沒蹤跡。沒蹤跡處不藏身。

偶成

性癖風顚世上違。賣茶生計愜其機。心休冷淡勝甘旨。意足破衫齊錦衣。醉酌井華涵月荷。暮挑瓦鼎帶雲歸。老身用得這般事。物外逍遙絕是非。

自贊

夢幻生涯夢幻居。了知幻化絕親疎。貪榮萬乘猶無足。退步一瓢還餘有。無事心頭情自寂。無心事上境都如。吾儕苟得體斯意。廓落胸襟同大虛。

夢中作

困去窮來無一物。淸貧瀟洒淡生涯。唯餘半夜寒窓月。一片禪心相照歸。

一讀の間自ら三隱布袋の遺響あるを覺ふ。こは字句の上においてのみ學んで至り得べきにあらず、その境界すなはち然るのみ。讀む者以てその心目を暢へ塵垢を滌ぐに足るべし。また傳へて翁の道歌と稱するものあり、果して翁の詠みものなるや否やは知らねど併錄す。

笛ふかす太鼓たゝかす獅子舞の
あとあしとなる胸のやすさよ

翁また筆札を善くし、古樸にして翁その人を面のあたり見るの心地す。茶事を好むの士は、之を珍とす。

さて翁に從ふて遊びし者は、緇素ともに俗塵を脱したる名流なりき。彼の蕉中和尚の如きは、道交頗る密なりしにや、北禪草稿の中に翁に關したる詩または文多し。また當時に蘭陵和尚いはゆる夜雨禪師なる者あり。天台の碩學金龍敬雄上人が評して、「奇標超邁。目光烱々。儼乎如阿羅漢。灑々落々。無世俗之態。無香火之氣」といひたる名稱なるか、翁とも交りたるものと見え、その草庵槁に翁に寄せたる詩ありいはく、

第二橋邊雲半間。無心老去不居山。賣茶却隱紅塵陌。一釜松風接往還。

俗人にて尤も親しく往來せしは龜田窮樂といふ書家なりき。閑田子記していふ

龜田臾尾は書をもて鳴り、號樂の號をもてしらるものをものともおもわぬくせものなりし。賣茶翁とひとつ小路に住し時、莫逆のまじはりを結びて彼は茶をのみ、此れは酒をのむ。時ありては、酒のまぬ賣茶翁壺携て酒買に行ける日もありけるとぞ。後賣茶翁双丘の東畔に轉居し、梅雨連月に及び、茶を買ふ客なし、錢筒傾盡して糧絶し時、窮樂是を聞て至りとふらひて賦はしむ。

その交の淡きこと水の如きを見るべし。その他、池大雅、大田見良なども、翁に親しみたりしが如し。見良が「翁茶うらば、吾は藥をうらん」といひたるよしは、閑田子も記しおきぬ

賣茶翁八十九年の間、俗をいでゝ俗に入り游戲三昧にして世を終ふ。明和甲申夏五月、翁の法弟大潮和尚その像に賛していはく、

翁矣此翁。逃于賣茶。跡徧京洛。居任狹斜。我思彼美。西方之人。偈語銜口。瓦鼎賞春。觀翁風度。無與比倫。蒼顏如鉄。素髮似銀。燒却茶具。一段精神。橫身

閙市不動織塵巖言清謔孰測其眞。

翁を盡くして些の遺憾なしといふべし。倘し翁をして大寂定中に知るあらしめば、必らず呵々大笑して點頭なすべきなり。

因に記す賣茶翁寂をしめして後二十年にして、嚴方嚴なる者あり、亦た茶を煮て飯に博ふ。方嚴字を祖永といひ、また曇淵と稱し、別に自在庵、梅谷、賣茶翁などの號あり。俗姓を笠原といひ、筑前福岡の產なり。二十歲にして出塵の志を發し、京の妙必寺に入りて薙染し、遊方して相州の瑞鹿山に挂搭す。方嚴平生風雅を好みて、深く賣茶翁を欽慕し、瑞鹿山をいで、茶笈を負ふて名山大川を探り、隨處に茶を煮て客に供す。晩に三州の八橋村に來りて在原寺に留錫し、終に無量壽寺のすたれたるを興して老を養ふ。紀伊大納言及び諸名公多く方嚴を崇敬す。文化年中大納言自ら通仙翁の三字を書して贈る。後文政十一年の春、大納言の招きによつて江戸に遊び、病でその藩邸に寂す、世壽七十又七。

遺偈に曰く、

山中春靜梵王家、木版聲終解結跏。七十年間總若夢。今朝落盡昨朝花。

(五) 夜雨和尙

明の陳眉公いはく、故無脂粉之氣、僧無香火之氣、是其品之最者也とげたし、僧に香火の氣なきものは、これを稱して敬聖といふ。なほ儒家にいはゆる狂狷の士のごとし。世出世間その心同しからすといへども、その跡はすなはち相肖たり。而かもその人はなはた少し。むかし、僧賀あるは狂雲のごときものあり。その後、久しく聞かす。寶曆明和の頃にいたりて、黃檗に賣茶翁あり、洞上に蘭陵禪師あり。賣茶翁の事は、世のあまねく知るところなれと、蘭陵禪師のことは、世あるひは知らさる者多し。

禪師、法諱を越宗といひ、蘭陵はそか號なり。いまだいつれの人といふことを知らす。年わかくして、石州の圓光無隱老人に隨ふて學ひ、つひにそ

の印證をうけたりき。それより老人をたすけて雲衲を接し、またその文字の業をたすけたりきといふ。かの心學典論のときは、實に禪師か校訂の勞をとり、かつその序をも物せられたりき。禪師に草庵稿二卷あり。その中の二三の偈をかいねきつ。

湖上晩眺

秋天日暮一聲鐘。寒雨蕭條浦上松。水自流兮人自老。依然七十二芙蓉。

示僧

千般學道不知眞。辛苦一生勞此身。放下卽安君信受。東西南北出家人。

客問參禪念佛優劣

參禪念佛兩重山。上下根分一世間。到得同看峰頂月。但憐不信苦躋攀。

佛滅日

古佛涅槃雙樹中。年々此日恨無窮。夜來風雨花狼藉。世相應知畢竟空。

發心便見菩提成。任運隨緣稱佛名。定散不論末抄句。銀山鐵壁在平生。

新僧堂示衆

十萬八千選佛場。龍蛇混雜氣如王。欲知吾道無多子。濟北三千不出堂。

示衆

萬象之中獨露身。但須息見莫求眞。一翳在目空華落。斯道從來當處親。

示卽心法師

大事因緣君若何。日昏路遠莫蹉跎。卽心是佛未休去。是佛卽心念彌陀。

永平和尙贊

三年一閏五更鷄。頭相更無雙字題。脫落身心明歷々。日升東矣月沈西。

關山國師贊

破衲藤環名翼飛。深山不許鎖紫扉。一言判斷西來意。栢樹枝頭着賊機。

如上の偈もて、禪師か臨機說法、洒落不礙の老宗匠なりしを知るへきなり。

禪師かいまた山居せさりし前は脚にまかせて四方に歷渉し朝野市井をわかたす酒肆淫坊をもきらはす いつくの家とても そか心の欲りするまゝに宿をもとめて過くされたりされは人ありてその故を問ふことあれはすなはち曰く わか道當所にあり 間 を容れすと思ふにこはまたく心性を鍊らむか爲めなりしのみ。

いくほともなく去つて筑紫の山中にかくれき。また大和の葛城京の東山なとに草庵をむすひ枯淡を甘なひて日をすくされたりき。禪師性ことに夜雨を愛して いつにても のふる夜は香をたきて靜坐し いなのめの明ゆくまて睡につくことなしかこれは山村の人はじめその名を知らされはたゝ何となく夜雨和尚とて呼ひける禪師もまたその號をかしと思ひてみつからも夜雨和尚と稱しきけだし推杭軒中の老和尚と毛病を同しくするものか。

禪師がつねにもとも親しく交りたる人には天台の碩學金龍敬雄上人

ありき。上人のいはく、今蹤然而存者。海西蘭陵禪師一人而已。余餐其風而未得採道儀者十有餘年矣。客秋忽來于洛下。卜居於東山。一日訪余廬。余目擊其道貌。奇標超邁。目光烱々。儼乎如阿羅漢。灑々落々。無世俗之態。無香火之氣。過於所嘗聞者。乃爲之心醉焉。於是社盟奠矣。從時厥後。往來遊戲。道交日熟矣。又曰く、以師之道。若莅鉅刹。爲獅吼。則曲盛木上作射犴鳴者。氣喪胆裂矣。可惜哉。この言もて禪師を知るへく、また二師が相得たるのいとふがうりけるを知るにあまりあらむ。また賣茶翁とも交りなりき。禪師か翁を訪ひたる時の偶あり、いはく、

第二橋邊雲半間。無心老去不居山。賣茶却隱紅塵陌。一釜松風接往還。

冨時叢門中に碩學の名高かりし大潮和尚のことき。またともに往來したりきと見えて、そのたかひに應酬せし偈頌など少ならす。

また俗弟子には、長門の獨嘯庵永富鳳あり。獨嘯庵は、山脇東洋が門より出てたる俊傑にして、その名を天下に聲かしたる者なり。之をしてその

門に禮せしめたるを見ても、禪師かよのつねの人ならざりしをおもふべきなり。

或る人ありかつて禪師を評して、二乘獨覺の禪にあらざれは、まさに、是れ風癲の人なるべしといひしを、獨嘯庵これを辨していはく、跡を陵藪に絕つは易く、形を朝市に渾するは難し。禪師の道を覺するは、これを世間に得たりこれを山林に得たるにあらず。之を二乘といふて可ならむや。まいてみづから七情の變を究め試むるを、風癲といふて可ならむや。誰か能く禪師が心術の窺ひ知るものぞと。這の弟子ありて、よく這の師を知れり必らずしも身後の楊子雲を待たざるなり。

(六) 平田太

世の國典を學ふ者、おほむねみな口を極めて佛教を罵り、斥けて異端邪說とす。而かもいまた曾て一卷の經をも讀まず、金仙氏の本旨の那邊にあるを知らず。這の輩の如きは、世の所謂はゆる「不食嫌」なるものなり。平田篤胤もまた平生僧を痛罵したりしをもて、世多くは篤胤を以て、太甚しき排佛家となすと雖も、決して然らず。特に佛心宗に歸依し、最も正宗國師に心服して、近古希有の大知識と稱したるを見ても、世の國典學者と異なるを知るべきなり。

篤胤の沒するや、秋田の廣澤山寶鏡院に葬る、正洞院柏庭和尙香語あり。これ篤胤が禪宗に歸依したるの證左に供すべし。香語にいはく、

見者悲傷聞者驚
年光走過夢輕々
穿鑿北邙山上土
唯埋死躰不埋名

恭惟
常行院東華大角居士

英雄霜冷　談笑春溫
旋博愛仁　門下三千賓客
欺敵國勇　胸中數萬甲兵
匪管文武兼備
唯一神道超此
會得禪家商量　鼻笑釋迦
尊重達磨
塗汗日蓮
拗破餘派宗匠
誑說親鸞
視聽所不到　論說縱橫
言語所不及　辯明分明
研究敎旨　如龍浮水
摸索祖道　似虎靠山

到這裡
名翼博天　九萬里風　北溟鯤
精神驚曉　六十八年　南柯夢
意氣山高海濶
德澤雲行雨施

如上閑絡索平生需用底之三味也

神といひ佛といふも、究竟する所に至りては、皆一なり。大空すべて神道の源を究めて、また老胡の道を悅ひたるは、素とより怪しむに足らざるなり。

(七) 竹田居士

彭城百川いづるにたよむで、南宗の畫やうやくわが國におこりそめにき。これより祇園南海、柳澤淇園、宋紫石、池大雅、村瀨栲亭、皆川淇園、野呂介

石のことき輩ありて、文學の餘適をもて、高遠の畫を成したりき。然かはあれど、みなおほむね謂はゆる仙鼠丹を喫していまだ全く化せさるの評を免かれず。田能村竹田いでゝはじめて南宗畫を集大成したりき。

そも、竹田の畫におけるは、初めは六法を古文罪にまなび、宋元以來の畫論を原ね、或ひは土佐氏の法に倣ひ、或ひは松花堂の筆意を撫し、間雜ゆるにおのが意をもて、別に機軸を開き、漁樵耕牧、山水花鳥、その意のことく、而かも絶えて倖々嫌媚の習なし。上野の金井烏洲もと畫をもて名あるものなり。かつて竹田を評して曰く、

竹田田能村憲。字君彝。豐後人。風流文雅。一世才子也。能畫。人之欲畫不能畫處。又能言人之欲言不能言事。其名最顯于畫。平生所爲。多出於康熙以後之手段。

この言よく竹田の畫を盡したりといふべし。然るに、竹田かたく自ら守りて、敢て時好に阿らさるをもて、時眼に入らす。浪華の米山人その畫を

見て、ふかく激賞していふ、わか衣鉢を附屬すへき者、唯た吾子あるのみと。賴山陽もまた竹田の畫をよろこひ、人に逢ふて繪事におよふことに、必らす竹田を稱したりき。これより後、竹田の畫名、天下にひろごり、その寸絹尺紙も、洪璧のごとく藝林に珍とせらるゝにいたりぬ。

竹田は、南宗畫の泰斗なるのみにはあらて、その才藝太だ多くして、柳澤淇園にもゆづらざるものありき。されと、世或ひは之を知らすげたし、畫のために蔽はるゝのみ。少しく竹田か繪畫以外の事を語らはや。

竹田の子如仙の記する所によるに、竹田は、岡藩侍醫の家に生れたりしかと、その業をつぐことを好まず、いはく、人を醫せむよりは國を醫せむには如かすとて、もはら經學を脩め、二十ばかりより、熊本にあそひて、李紫溟、村琴山らに學び、江戸にいでゝ、古屋昔陽、岳東海の門に學ひき。唐橋世濟の死するや、竹田すなはち代て豐後地理志を編みぬ。文化三年、年三十にして、京都に上り、村瀨栲亭の門に入りき。竹田もと經濟の志あり、し

ば〳〵書を藩侯に奉りて時事を痛論せしかど、みな用ゐられず。こゝにおいて、分のその分に匪らず、時のその時に匪らざるを思ひつひに病と稱して致仕し、また世事を言はず、權貴の門を踏まず、はじめてその樂託の性を肆ることを得たりき、

如上のごとく、竹田すでに經藝を攻む、故にその文もまた好し。わきて小品題跋のごときは、尤も妙にして、當時山陽をのぞきては、竹田の右に出るもの少かりき。こは、自畫題語を讀みたる者の能く知る所ならむ。その詩もまた文政十七家の一人として、佳什太だ多く、決して海屋、棕隱、松南諸家の下にあらず。竹田わかき時、長慶集を讀みて、愀然として悟り、七古一篇を賦していはく、

七八年前始咏吟。暗生塵世厭離心。爾來流轉東西路。單身得備嘗浮沈。
今日扶痾又吟咏。倍知厭離入骨深。行文不必要奇隱。情眞能徹石與金。
至樂處藏至悲旨。極樂地包極衰理。狂言綺語七十卷。成佛因緣存此裡。

小蠻細腰樊素唇。料知天女化現身。池上双鶴門前駱。他生應得變爲人。
聽之截斷煩惱苦。咏之解脫生死輪。信口吟了千萬句。漸炮殘燈冷香獸。
信海茫々東海東。生晚落在長慶後。一吟一更天欲明。復沾前淚未乾袖。

これ竹田が尋常詩を賦すと相異なるゆゑなり。竹田また詩餘を巧にす。篠崎小竹、竹田のつくる所を評して詩餘中の猶龍といひたりき。是れより先き、わが邦の詩人の詩餘を作る者のいと稀れなりしを、竹田その藝苑の闕陷となして、自ら長崎にゆきて、清客朱柳橋、江芸閣などに質し、竟に塡詞圖譜を撰みて世に行ひき。これよりしてやうやく詩餘を作るものいでにき。こは、またく竹田先倡の功なり。

竹田また筆札を能くす。小竹が學士鄭虔をもて稱したるは、之がためなりき。余かつて之を聞く、竹田ある時字を作りしを、山陽翁臥しながら之を見つゝありしが、遽かに起て容を改めていはく、運筆の法、筆勢の勁なる、我まことに君彝にしかはずと。竹田かつて大雅の字を評して、

又所作之字。不在畫下。而價頗低。蓋畫猶入俗眼。字竟不入也。

といひき。筱小竹之を評して夫子自道となしたりき。二翁は當時の儒士中において筆札をもて稱せられたる者。而かもその言ふところ此のごとくなるを見ても。竹田が書を知るに餘りあらむ。

詩、書、畫、三絶の外、また和歌をよくす。尤も西行の山家集をよろこひたりきといふ。おもふに、和歌は、益を上田秋成翁に得たるもの多かりしならむか。

竹田が文事におけるかくのごとく多能なりき。その風流餘伎にいたりては、聞香、抹茶の道にも通したりき。香は、夙に彼志野氏の流を酌みて、五味六圖の辨を究はめ、花の朝、月の夕、獨り焚き獨り聞きて、ふかくその妙を悟りきといふ。茶は、はじめ千家の門に入り、いはゆる皆傳なるものをうけたる後に、みづから支那の說を招撫し、煎點泡沸の法にたいして發揮するところ多かりきとぞ。上田秋成翁のごときは、その茶事の友なり。泡

茶新說を讀めは、その造詣するところの太たふかゝりしを知るに足るべきなり

竹田の多能なることは、實に柳澤淇園の如くなりき。而かもその深く心を禪要に寄せたることもまた淇園あるは大雅の如し。竹田が浪華の生玉持明院に寓する時常に慈雲明道禪師の室に入りて、その痛棒を甘なひ、また月峯和尙らと共に切磋提撕したりき。結伽圖の題語に曰く、

結伽圖成。附短古一篇。贈道欽禪師。當吾發阪府。惠吾坐禪儀。匆々別君去。上舟仍奉持。開蓬且趺坐。誦讀十二時。不思量底語。且量更且思。吾元凡夫子。一心頑且痴。而遭眞實義。豈無所少知。應分聊受用。樂之不覺疲。譬如大倉米。每人輒博施。無大復無小。得者盡忘飢。歸家後養病。杜門日無爲。乘間寫斯幅。郵便遠寄師。是際春猶淺。殊氷逗研池。畫拙字亦醜。恐難免一唾。禪餘幸披覽。速附丙丁兒。

この語をもて見れは、初めは永平の非思量底を思量するより入りたる

ものゝごとし。竹田またいはく、

日出而起。日入而息。花開而耕。葉落而收。鳶飛于天。魚躍于淵。物得其所歸。蓋天之爲焉也。故山中人讀書可不讀。亦可讀。而生機心。一讀一生。是々非々。競名奪利。營々乎以沒其世。不及不讀之爲愈者萬々。

その見地境界のならひ高きは、この語もて證すすべし。

嗚呼竹田が老胡の道によりてその自心源を究むることかくのごとし。その四通八達詩文における書畫における文閑香抹茶における、みなその神に入りぬ。これ他なし。一の自心源を究めたるが故のみ。竹田の竹田たるゆゑんのもの即ち此に在り。その自ら杜少陵の詩語をとりて老畫師と號せるは謙のみ。だゞその先生有道出羲皇先生有才過屈宋の二句を移して以て竹田を評すべきか。願はくは世の人よのつねの畫師をもて竹田を見るなくむは好し。

(八) 風外和尚

自分の屋裡のことがいそかしいた耻しい境界でござるから、なか〳〵他人の田地を耕すといふやうな閑なる身分ではござらぬ。しかし、一席むかしの宗師の事跡にてもた話をして、お互ひに勵みあふ種にいたさうと思ふ。

さて、世がだん〳〵末世になるにつれて、宗門もむかしの樣にもなく、あさましい有さまに立到りまして、如法に行ひすます人は、まことに雨の夜の星よりも少なくなりました。さて〳〵口をしいことでござる。かりそめにも佛祖の飯をたらふく喰ひ、佛祖の衣を暖かに着るからは、何卒佛祖の行を行ひたいものでござる。慈鎭和尚のお歌にも「なにゆゑにすてける身ぞとをり〳〵は袞にはちよ墨そめの袖」と。なんと簡切明快の慈敎ではござらぬか。また江州瑞石山の開山寂室禪師かゝその門人秀格

といふ人に示めされた語かあるぞその語を摘むて言はうなら斯樣だ「山僧に緊要の一訣があるぞそれを寶として、久しく大切にしてゐるが、今お前に話すから、輕々しく人に語りもらしてはいけないぞ。お前が毎日々々朝起る。先づ手でまるい頭を撫で、また目で以て、その身にかけてゐる袈裟を顧み、そして心の中で、我は辱なくも釋迦牟尼世尊の遠孫である から、よしんば如何樣の事があらうとも、身を大事に持ちすまして、毘尼軌範を破つてはならぬぞと戒めよ」といふが大意じや。誠にありかたい慈敎で老婆なることでござる。とかく、その袈裟ころもや、まるい頭に耻ちぬからして、戒を破つたり、勢利に媚ひ近つきたりして、坊さんにあるまじき所行を犯すのでござる。ナント皆さんお互にシッカリ憤發して孤危の家風を起したいものではござらぬか、

曹洞宗も世の末になるにつれて、如何はしき似非坊が出來て自然と世の口の端にかゝる樣になりましたなんぼう口をしいことではござら

ぬか。今はコンナ風になりましたが、前にはすばらしいお師家がタントありました、通幻や玄虎藏主のむかしはいふまでもない、二百年前になつても高祖道元の肉未だ冷かならずとの評もあつて、彼の宇治の興聖寺の中興開山萬安老人やの、富士山の人穴で坐脫せられた案山和尙やの、乃至はまた臨濟の五百年間出の宗匠とうたはれた所の彼の名高い白隱和尙が、駿河の國からわざ〳〵遠い泉州まで道風を慕ふてゆかれたる蔭涼寺の鐵心老人や壽鶴老人があり、さては大津の辻で草鞋を拵へてゐられたる桃水和尙などもありました、月舟や卍山や天桂や獨庵などは今更云はいでも皆さん御承知ぢや。是らの御方が今時一人でもおいでたら、山高きにあらず虎あれば則ち靈なり、水深きにあらず龍あれば則ち靈ありの喩で、大法を維持するはワケのない話ぢやが、をしいことでござる。この通り多く大知識がある中にも、私が平生もつともありがたくお慕ひ申すのは、彼の腹立坊主と俗にいはれた風外和尙でご

ざる。私が先年少し和尚の事をしらべておいたから、少々お話をいたしませう。

風外といふにも二三人ある、第一に腹立坊主の風外と、東皐心越の法を嗣がれた風外と、ソシテ彼の總持寺の奕堂禪師や原坦山老人の師匠なる風外とがある。心越下の風外は法諱を焉知(えんち)といひ別に默室と號して、正德三年正月十四日といふに閑寂せられた人で、水戸の祇園寺で心越の鉗鎚をうけられたといふ、卵塔は駒込の高林寺に殘つてあります。これは、高林の恩山和尚とは、法の上の友達であつて、殊の外懇意であるから、冬の内は、いつも山から出て來て高林寺に逗留せられた。この寺に居られた時に、人が物を問ふことがあつても、それには返答もせず、また物かたりもなく、坊さん達が碁を圍むのを、側から打見るのみで、默々として、一語もなかつたといふ。この風外も、なか〳〵奥底の測りかたい和尚でござる。大抵世間の人は、この風外を腹立坊主(はらたちぼうす)の風外と混して同し人

として居るから、序にこゝにお話をしたことでござる。私が今お話をするのは、風外慧薫の風外である、先年さる處で、この風外和尚か眞筆で腹立坊主を書いたる所の自壽賛を拜見しました。それは、おそろしい面の坊さんを墨畫で書いて、その上に、敎外別傳なし、本來一物あり。ものいはぬからは心に一物のなくてかなはぬ腹立坊主と賛がござりました。これだけでも、その人のなみ〳〵ならぬことが知れてある。

風外和尚の生れは何處かといふと、上州の碓氷郡土鹽といふ山間の村で生れたといふことである。虎は生れて呑牛の氣ありとかいふて、さすがに他に違つたところがあるもの、風外和尚は、極幼少の時分から、なか〳〵世緣の控勒をうけない。七八歳で出家して、處々方々へ參詢して、名高い物外和尚の室に入り、はては渭川老人の惡辣なる毒手に觸れて、見事に大悟せられて、機鋒がすはらしくはげしくて、風外〳〵と叢林に鳴り渡つたところから、相州の成願寺の切なる囑に依て、そこに住せ

られたが、その意にかなはぬ處があつたかどうだか知らぬが、暫時で退山せられて、同し相州の曾我中村の山の中に入つて穴で住ゐせられた。勿論信者もなければ、侍者もなく、道具もない。たゞ錫杖一本と鐵鉢一枚で、腹が減つたら、山を出で人家の殘飯を貰ふて喰ひ、二六時中、默々として岩穴の中に打坐してゐられたから、何も知らぬ村人などは乞食坊主と思ふてゐた。穴居の時の偈といふがある。「道人坐臥寸心間。火刼不移這壑邊。風動槐安樹下夢。六窓深閉覺還眠」といふのである。丁度、大智禪師が肥後の山中に居られた時と同しである。ある時のことで、文道といふ雲水坊さんがわざ〳〵來て教を乞ふたから、風外和尚、之を穴に留宿せしめたが、あくる朝の齋食に、文道が鉢盂を持てゐないされはとて外に盛るものもないところから、見るもぞつとするやうな生々しい髑髏を拾ふて來て、それへ盛つてずゝめた。すると文道先生氣味がわるくて、すがに口にえつけない。そこで風外和尚例の大目玉をむいて大立腹、貴

さまは法のためにわざ〳〵來だといふに、之を嫌ふとは何事だそんなたわけたことで修行がなるものかと、まくぢきに打き出してしまつたといふことでござる。これは御尤なことで、文道などには朝鮮の何とかいふ太知識が悟られた因緣でもいふて聞かしたかつた聞かしてもダメか知らねど。

桃李もの言はずとも其の下自ら蹊を成すの喩で、風外和尚はコンナ山奥に隱れられても、道譽は爭はれずして諸方に轟きわたつたからして、來て相見を乞ふものが多い、これが眞實に大法の爲めに不惜身命の者なれば、眉毛を惜まず接得もせられたらうが、みんなそでないから、うるさくてたまらぬによつて、又飄然と此處を立退て眞鶴山に登られたが、そこにまた岩洞があつて地を拔とおよそ千仞もあり、斑らな石が列び立てなか〳〵おもしろいから、そこへ居をうつして自分で菅亟根の御姿を刻みて安置して土地神となし、かつ其の側に一臺の壽塔を作り銘

を彫られた、その銘は、「落葉翻風前、桑華豈可傳、全身知石塔、堪笑幾隨緣」といふのでありました、こは慶安年中のことでござるげな。こゝでも矢張り土民ども乞食坊主のやうに思ふて輕蔑してゐたが、ある時のこと、食ふ物はなくなる雨は降る、托鉢に出るに笠がない、そこで洞の前にあつた所の根不川石の面が平たくて重さ百貫もあらうといふ大石をば笠の代りに頭にのつけてから、に人家へ出られた、そこで土民共は大變にびつくりして、これから大に尊敬したといふことでござる。

この時分に小田原城主は稻葉侯で、これ又大そう佛法歸依者でござつたが、風外和尚のことを聞かれて、左樣な禪僧ならば、寡人も逢ひたいとのことで、使を遣つて懇ろに小田原城中へ連れて來た、ところがこの時たま〳〵お客があつて酒宴最中、久しくの間客間で待たしておいて出て來ないから、和尚よろこばない、直さま筆をとつて、「太守一國鎭、我是風外身、卒客無卒主、宜假不宜眞」と屏風の上へ墨くろ〳〵と走り書きして

ひよいと去つでしまはられた、この行を見ても、風外和尚の眼中には王侯貴人もなくして、外を慕ひ高を求るの心は露これつぱかりもなかつたのは明かに知れることでござる。

やはり又この時分のことで、稻葉侯が眞鶴山の景色の眺よき處を擇んで長興山といふ見事な伽藍を建立して風外和尚を開榛にと招かれた、風外は一も二もなく之を辭した、致方がないといふので黃檗宗の鐵牛和尚を請じて初代住待とせられた、この鐵牛和尚は黃檗の二代木庵禪師の神足で嶮峻なる風の知識でござつた仙台の大年寺(伊達綱村侯の建立)で上堂の時に、ある僧が、蚊子、鐵牛を咬む時如何と問ふた、鐵牛、藏身の狀をなす、僧更に呑却し了れりといふ語の下より、直ちに何としてか這箇の一棒を餘し得たると熱棒を喫せしめたるに、その僧は忽ち棒下に絕息してしまつたから、その場で「紅葉落時山寂々、蘆花深處月團々、提起す向上那一刀、虛空碎作七八片」と引導せられたといふが、その手段の

峭峻なることはこの類でござつた。されば風外和尚は點頭せなかつたけれども鐵牛和尚が來たから買褚得薛不落節といふものだ。

さてこゝに一つ是非よく心をとめて聞いてもらはねばならぬ話がござる。それはある日稻葉侯と鐵牛和尚と同道で風外和尚を尋ねられて、鐵牛風外に向ていはるやうかく世をのがれたまひて寂靜を旨と修禪せらるゝことまことにうらやましきことなりとの物がたりに風外和尚云ふ世を遁るゝことはいと〳〵造作もなきことにて出家も成りやすきことなれどたゞ〳〵出家の後の出家はむつかし。おほかたの僧は姿は圓頂方衣なれど心の中は在俗に劣れり。まこと世は捨てやすく又捨てがたきものぞかしと笑はれしといふことでござる。實にこの言ばの通り家を出ることかたきにはあらず寺をいづることがむかしいことにござる。されば楊岐下の應庵も常に衲僧家は草鞋を着けて住院すべしといはれました。折角憤發して佛弟子となりましても蛇がなん

どが窟を慕ふやうな風では何の所詮もなきことでございます。況大年などの俗士から秋風猶戀舊窠泥と笑はれぬやうにするが肝要ではござらぬか。

又この眞鶴山にお住の時に父母の遺像を石に彫り刻みて朝な夕なに香華を備へて肉恩を謝せられました。この石像二體は貞享の三年に稻葉家が越後へ國がへの時に領地小田原より、その下邸なる築地小田原町へ引きうつしました。のちまた之を向島の弘福寺へ移しました。當時現に存してある。風外和尚は鐵牛禪師と懇意であつた因緣からであらうと思ふ。如何なる譯でか世上にて之を咳の婆々と唱へまして、小兒の百日咳の祈願をなして快氣なる時に、煎豆に茶を煮て添へ手向るといふことになつてあります。

風外和尚は、お話申すやうな人じやから、學道ばかりで、外の事は出來ないかといふに左樣でない。書も見事で、畫の方もなか〳〵おもしろくや

られたどりわけ、達磨大師は、筆意自ら超凡で、世の畫師などのなか〳〵まねの出來ない趣がありましたといふことで、然し俗人など如何にねもころに願ふても、容易に書かないが、無邪氣なる小供が來て賴めは、直く筆を染められましたといひます。

眞鶴山を出でられてからは、伊豆の山にも隱れ、また遠州や駿河の方をさまよひ、晩年になつて相州の金指郷の石岡里に來られて、草の庵をむすびて住まれましたが、ある日のこと。土人に青銅三百文を與へて穴を掘らしめ、自分でその中に入つて、さあ宜しい、土をかけてくれいといはれまして、立ながら大往生を遂げて恰かも植木のやうであつた。土人共びつくりして、名主を呼んで見せたが、はや目をふさいでゐられたといふことです。これらこそ立亡とも申すので、大自在底を得たる人でなければや、這般の境界はこさりません。江湖の同參、一憤發してからに、風外和尚に相見しては如何でござる。

(九) 誠拙和尚

禪宗の宗匠達の所行といふものは、なか〳〵生滅の舌をもて彼是と談されたる譯のものでない。その境界に至つて見なければ、その所行の有かたいことがわかるものではないのだ。

今少し鎌倉の誠拙和尚の事をお話して見たいが、我々共の目のとゝかぬ所も太た多からうと思ふ。

曹洞は別として、近世濟家で、尤も多くの佛を打出した人といへば、峩山と月船とであらうよ。この月船の門から出た人では、まつ第一に圓覺寺誠拙和尚に指を折らねはなるまい。尤もこの和尚は、峩山の門で、隱山や行應やの人達と共に切磋したから、あなかち月船にのみ依つたのではないが、とにかく月船門下と見て差支なからうか。

栴檀はふた葉より香はしといふか、なるほど爭はれぬもので、誠拙和尚

は、驅烏の時分から、すでに大だ他に違ふて居つた、何でも初め宇和島佛海寺の靈印に依つて薙染して未た間もなき時のことで、ある日、伊達侯、これは名高い春山公の先代だらうと思ふ。この侯か、一日、野かけのかへるさに、佛海寺に立寄つて休息をせられて、誠拙和尚を呼んで按摩せしめて、且つ云ふには、小僧や、江戸參勤より歸る時には、いと好き法衣を持ち歸つて、貴樣に土產にするそとあるから、誠拙和尚も小供心にうれしく思ひ、有かたいよしを答へて居た。かくてその後、侯か江戸から歸りて、また佛海寺へ來て、例のことく靈印和尚と四方山の話をして、誠拙和尚を呼ひて背を打たしめた。そこで和尚か法衣の土產は如何にしてたまひしそと問ふた所か、侯、全く忘却したわいといふ言下に和尚武士に似合はぬ二言の奴よと拳をかためて二つ三つ侯の頭を打つて、ふいと寺を出てしまうた。さあ大變、當時は、ちよつとしたことでも、無禮打とか何とか云つて、人を斬るのてあるから、まして、一國の大守ともあらう人

の頭を打つたのたから、如何樣のことにならうかと、靈印和尚、大に恐れてお詫をすると、侯さすかに賢諸侯の譽ある人だけに、いやいや小僧を咎めるには及はぬ、全く我かわるい、約束をしておきなから忘却したなとは、大名の身にもあるましきことである。それにしても、この小僧は凡人てはない、行末めでたい大知識になるてあらうから、氣をつけて育てゝくれいと、懇々とたのまれたといふことだ。獨國老漢の僧寶傳に書いてあるとは、少々違ふて居るか、私のは、環巖和尚が晦岩老人から聞かれた話だ。それはとにかく、誠拙和尚が幼少の時分から群に拔んしてあつたことか知れる、

誠拙和尚か初めて月船に相見した時の話が、太だをかしい、當時天下の宗匠は、永田の月船であるから、一つ參じて見やうといふのでは、はる〳〵氷田へやつて來て、挂搭を請ふたが、さて許されない、門宿を賴んて見たか、また許されない、時にこの日は雨降りて、合羽を着て永田山を下ると、

地藏堂があつたから、これ幸ひといふので地藏堂の中に入つて、遠慮もなく石地藏の頭に腰をぶつかけて、こくり〳〵と心地よく眠つて居つたなか〳〵凡骨で這箇の辣手段が出來るわけのものでないのさ。ずると月船大和尚がたま〳〵餘所から歸て來られて、ふと之が眼についてて、大にびつくりしてからに、僕を走らせて挂搭を許されたといふことぢやこれが謂はゆる惺々は惺々を知るといふのさね。

誠拙和尚は大事了畢の後は、主として圓覺の僧堂を守りて江湖の燕頷虎頭を接して居られたことは、大分長い長のことらしい。圓覺に親篆しられたのは、文化十三年すなはち和尚の年七十一のことしやそのの頃までは、圓覺も大變荒れてあつたらしいが、誠拙和尚が住でからは、百廢を興して、高く法幢を掲げられたによつて、彼の名高い清陰、淡海、東海、巨海さては泊船拙庵、晦岩などいふ豪傑が出てたのだ。されば、誠拙和尚をもつて、圓覺の中興といふて好い。

圓覺住職中には、なか〳〵おもしろい話が澤山ある。少し話をしやう。その頃、深川の木場に白木屋といふ材木問屋があつた。何萬兩といふ大金持で、手代小者の何十人となく召使ふて、商買も手廣であつた。この白木屋の主人の某といふのが、大の誠拙和尚信仰者の一人であつた。誠拙和尚か圓覺の山門を改築する時に、白木屋主人が黃金百兩を懷中して、聊かなから改築費の中へ入れて下さいといふて、それを和尚の前に差出したすると、和尚、あゝ左樣かといふたのみで、有かたうとも挨拶をせない主人も變な顏をして引き下つたが、あくる日、また圓覺へ來て云ふには昨日差上まして百兩は、誠に輕少ではござるが、私の身にとりては、過分の喜捨でござる。然るに老師には一言の御挨拶を下されないのは如何でござると不足をいふ。和尚、主人のこの言を聞くと、忽ち顏色をかへて、鍋蓋を取つて主人に拋つていふには、貴樣の福因を植ゑたのではないか、老僧が何の有がたいことがあらうぞ、這の馬鹿野郎と。その聲さな

がら雷のごとくであつた。主人もなるほどゝ感心して、詫入つて歸つた。
といふことじや。實に親切とも老婆ともいふべきことぞ。
また一つ白木屋におもしろい話がある。ある時白木屋の一人の大切な娘が大病で、さま〳〵手を盡して療治をして見たが驗かない。醫者も最早藥の盛り樣かないと匙子を投げて、息の引取るのを待つばかりになつた。この上は神佛の力にすがるより外に致方がないといふので、急飛脚を立てゝ誠拙和尙を迎へに來たやれ〳〵それは氣の毒なことじやといふので、直くに駕に乘つて來られたから、主人ほろ〳〵泣きながら、娘が病氣の始終これ〳〵と話をして、何卒助かるやうに、有かたい御經を讀んで下されとたのむ。和尙、よし〳〵何でも讀んで進じやう。然し、御布施は少し多分に前金でもらひたい。老衲、後金といふのが大嫌ひだ、主人、それは一人娘のことですから、助かることなら、身代半分を御布施に差上ても大事こさらぬといふ、和尙、それでは金百兩と米百俵を申受け

たい。主人これは少し多過ると思へと、身代半分差上ても好いといふたが、和尙あるから、それは高い、少々まけて下さいともねきれない、承知のよしを答へた。和尙、それでは、それを急に人夫を仕立てゝ、鎌倉へ送つてくれと言ひすてゝずつと佛間に入つて、般若心經を口の中にもが〳〵誦じて居られたが、やがて娘の寢てゐる枕上に來て、お前もこの大家の一人娘と生れて來ながら、その榮花もうけないで死ぬかい、氣の毒のことぢや。定命といふものは、神でも佛でもものがれ樣はない。お前も定命で死ぬのじやから、誰を恨ることもないぢや。然しながらお前は仕合者じやぞや。今老衲は御布施に金百兩と米百俵を貰ふた。これは直に鎌倉へ送つたが、外の事に使ふのではないので、僧堂に居るわかい坊主共に食はすのじや。僧堂には五六十人も居るが、この中に五人や六人は慥かに眞の佛に成る者がある。然ればお前は佛と緣を結んだといふものぢや。有がたいではないか。安心して死ね〳〵。お前は仕合者ぢや〳〵と言ひす

て、病室を出でゝ、老衲はこれから增上寺へ遊びに行てくるとて、ふいと白木屋を出でられた。あとで主人は大不平、折角大枚の金と米を費しながら、娘病氣平愈の祈禱もしてくれずして、却て死ねくとは何事だとこぼして居たが、それにひきかへて娘の方は、誠拙和尙の垂示を得てからといふものは、大安心を得たものと見ゐて、前の如く病苦にも惱まない。その晩もむつかしと思ふた大病者が死なぬ。二日三日と過ぎてけろりと夢の覺めた樣に治つたといふことぢや。この一事を見ても、誠拙和尙が人を度する手段の別であつたことがわかることぢや。

誠拙和尙が人に接する手段といふものは、太だ惡辣であつたから、久參の衲子でも、和尙に逢ふては一縮に縮み上つたといふことぢや。されば、天下の豪傑でもその一揖に抑せない者はなかつた。その頃天下の大老職を勤めた人は、例の名高い白川樂翁であつた。一體大老といへば、大變に威張つたものであるが上に、豪傑の樂翁であるから、一層の權威があ

つて、すばらしいもので、今の總理大臣ぐらひの話でなかつた。この樂翁が鎌倉を巡見した次に圓覺寺へ詣うでたことがある。樂翁が山門を入ると直に、般若水と題したる標柱を見て、何が故に般若水といふのだと誠拙に問ふた。そこで誠拙和尙は、卽今聾々として般若を談じて居るが、なんとお前さん聞けるかいと答へた。さすがの樂翁も會せなかつたと見えて、默然として過ぎられた。それからまた僧堂の前へ來て、坐禪牌が目についたから、これは如何いふ譯かと問ふたから、また誠拙和尙が云ふには、お前さんが縱ひ鐵の鞋を穿いて一日に日本國中を巡つて來ることが出來でも、這箇の坐禪ばかりは知れるものではないと答へた。樂翁も大に歎しられたといふことじや。さすがの無邊風月樓の主人も誠拙和尙にかゝつては、一口に呑却されてしまつたぞ。

誠拙和尙に歸依して心要を問はれた諸侯も多くあつたが、その中でも、雲州松江の大守なとは、尤もすくれた居士であつた。この人は、隱居して

不昧公といはれた人で、その才文武を兼ね、茶事を嗜まれて、太た風流な殿様であつた。誠拙和尚が不昧公の手爐を奪つた話がある。それは、和尚か晩年に京の相國寺へ行くときのことらしい。時しも冬の末で、箱根の山は一面の大雪で、寒風かひゆ〳〵身を裂くやうだから、和尚は籠の中で小さくなつて、ずた〳〵關所近くへかゝつて來ると、向ふの方からは下に〳〵と警蹕の聲をかけながら行列そろへて來る大名があるから、何藩だと聞くと、松江の城主だといふので、それは幸ひ好い所で逢ふたと、乘物をとめて待つて居ると、不昧公の方でも、誠拙和尚だと聞きて、すれ〳〵に乘物をよせて、一別以來の話を初めた。話の中に、和尚、老衲も年わかい時分には、素足に草鞋で雪中にこの箱根を越えたが、寒くも何ともなかつたのだに、年よつては意氣地のないもので、寒く凍るやうだといふから、不昧公、老師は斯樣の物を御持てこさらぬかと、銀の手爐を見せられた。和尚、なるほど此は調法の物でござる。暫時借用申すと取つて

手を煖めて居られたが、やがて好し〳〵乘物をやれと、そのまゝ手爐を横領して西に向つて上られた。この事なども、能く〳〵味ふて見ると、有かたい意味がある。苟くも武士たる者は、ずは鎌倉といへば、暑い寒いは云ふて居られぬ、千軍萬馬の中を往來せなけりやならぬ身でありながら、乘物の中でぬく〳〵手爐にかじりついてるとは何事じやそんなことではすまぬぞや。少しは寒い目にも逢はしてやるのも身の爲めじやとの慈悲心から出だ手段でもあらうよ。師家達のなさる所行は、うか〳〵と見てはならぬか此處ぞよ。

また不昧公と一處になつて風流の遊をしたる人に谷松宗潮といふおもしろい男があつた。この宗潮は、何でも京都の人で、稜々たる氣節があつたから、不昧公も、身分の違ふのをも打忘れて、つね〳〵往來をして、親しく交はつたといふことじや。ある時、宗潮が江戸に遊んで居つて、一日、不昧公の處へやつて來ると、不昧公、これは宗潮子、好いところへ參られ

た丁度今日は圓覺寺の誠拙和尚が來て茶の湯をする約束じやから、和尚にも相見して、ゆる〳〵遊んで居るか好いとすゝめたのである。宗潮いや〳〵今日はさうゆる〳〵居るわけには參らぬ、實は今晩吉原へ女郎買にゆく筈にしてあるから、今日は御免を蒙るとすけなく辭つて行つてしまつた。さてそれから餘ほど年を過きてからのことで、誠拙和尚が老病で玉龍寺で寢て居られたところが、宗潮、それは氣づかはしいことでござるといふので、羊羹を持て病氣見舞にやつて來て挨拶をすると、誠拙和尚むく〳〵と頭を擧げ大眼玉むき出して、貴樣は先年不昧の處で老衲と一處に遊ぶことが出來ないといふたでないが、老衲はも少し貴樣を大膽の男と思ふて居たに、今更何の顏して見舞に來たのだ、この馬鹿野郎と例の調子で頭から叱りつけたので宗潮一すくみにすくんで逃て歸つた。この後宗潮が天下の人物を擧げて、誰れも恐いと思ふほどの者に出逢はなかつたが、たつた一人、誠拙和尚ばかりは恐しかつた

といふたとのことぢや。

誠拙和尚一代には法戰も澤山があるが、充も名高いのは、彼の法身卽不解說法の商量さ。話の序だからいふが、それは長州山口常榮寺の性堂和尚といふ師家があつて、臨濟錄の法身卽ち說法を解せずといふ話がわからない、不解の不字は亦の字に作れば義理が穩かのやうだといふのが持說で、普說一篇を作つた。その大意は此樣ぢや、旣に法身といひ、卽ち說法を解せずとは此れ全く當然の語で、眞如斥收を判ずるを免がれないといふのぢや。誠拙和尚はこの說を見て、これはけしからぬ話だといふので、正法眼藏一篇を作つて、性堂の說をたゝきつけた。そこで性堂和尚がその法弟の妙峰和尚といふのを擇んで辯明によこしたところが、誠拙和尚忽ち煙管を擲つて、虛空そもさんか說法聽法を解すかといふ、その機鋒なか〳〵當るべからざる勢であるから、折角はる〴〵長州からやつて來た妙峰も返答も出來ないで、赤面して歸つたとよ。この正法

眼藏といふものが、今も相國寺に殘つてあるから、志ある者に拜讀しておくが好いぞや。

それで、誠拙和尚は、宗旨ばかりの宗匠で、風流氣のない人かといふと、左樣でない。筆札などもなか〳〵見事である。茶の湯は尤も好きで、常に錨をかけて松風を樂まれたといふことぢや。それに碁は尤も強くて敵手がなかつたといふことぢや。丁度その頃の本因坊と出逢ふたことがあつて、一席手合をやらうといふので、盤に向ふたが、誠拙和尚いきなり白を取つた。全體本因坊に對して白を取る法がない。本因坊は碁道の帝王であるから、將軍でも黑を取つたものだ。だから本因坊がこれは如何がのことでござる將軍でもこれ〳〵でござるから白を御讓りなさいといふと、誠拙和尚から〳〵と高笑いで、それは俗人共のことよ。老衲には決してかまふたことがないといふ。誠拙和尚にはかまいはないかしらぬが本因坊なか〳〵かまいはあるが、致方がない。本因坊心には心よか

らねど、黑を取つてぽつ〳〵と初めかけて、やがて石の二三十も下した頃に盤面を見て驚いた。その布石の安排といふものが大變なもので、黑の生る目は一つもない。さすがの本因坊も石を投げて恐れ入つたといふことぢや。これは私が或る碁客から聽いた話で眞のことである。何しても誠拙といふ人は大變な宗匠であつたよ。

(十) 佛通和尚

「狼玄樓、虎佛通」。これは久しく洞上の叢林に鳴り響いた詞であつたよ。當時、江湖の雲水が、唯た玄樓、佛通の名を耳にしたゞけでも、直くに縮み上つたといふことだ。

御承知の通り、玄樓和尚は、龍滿間厚の神足卽ち老螺蛤天桂老人の嫡孫であつて、家風森嚴、格別の手段を具へ、九十いくつまで長命をして、歳に化を揚げられたる大宗匠である。佛通和尚かこの玄樓和尚と併せ稱せ

られたるを見ても、なか〳〵の大宗匠であつたことが知れるのである。玄樓和尚の一大の演法またその行業は、すでにいろ〳〵の書物か世に流布してあるから、誰れもみな能く知つて居るか、之にひきかへて、その玄樓和尚と併稱せられたる佛通和尚の事蹟にいたりては、つばらに之を知つて居る者がない。そこで私は非常に遺憾の事に思ひしみまして、洞上の老宿に逢ふことに之を問ふに、未た誰れもみな知らないと云ふ。詮方かないから、これは佛通和尚か老後韜晦の地たる攝州有馬山中の光明寺へ問ふ方か善いと思ふたから、その由を手紙にて、今の光明寺現住明翫慈船師へ問合しました。所か、幸にも慈船師は懇篤の和尚であつて、直くに折返して返事か來た。當山開祖の事でもありますから、充分搜索して見ようが、一寸には知れない。二三月待つて呉れといふことであつた。これれは去る五月中頃の事であつたが、やう〳〵八月に入つてから、慈船師の手紙か着いた。いろ〳〵光明寺の古文書を取調へ、また法類

やら近邊の老人やらの間を搜し廻つて、やつとのことて、漸くこれだけの材料を得たから早速送る、佛通和尚一代の事を知るには不充分ではあるが、とにかく骨折つたので精確だといふことだ。私は年來心掛けて居た佛通和尚の行業の一班を知ることを得たのでうれしい。思ふに、廣い江湖には、私と同しく、之を知りたいと願ふて居る人達もあらふから、取敢す慈船師から送つて呉れられたる材料に依つて、かいつまんてお話をして見ませうよ。

さて、佛通和尚の鄉貫はいづくで、俗姓は何といふか、如何なる人の子であるか、どんと知れない。寺の言ひ傳へに依ると、何でも元は關東あたりの武士でもあつたらうといふことだ。東門慧西といふ和尚の會下に久しく侍して、其徽を吸盡しられた。その投機の偈といふのかかうてある、

「此事懸懷十八年、幾回得力未安眠。一呼一諾明了々、咄却從前滿肚禪」なか〳〵苦勞をなめられたらしいぞ。この慧西といふ和尚の事も、さつはり

知れない。然し、佛通和尚を打出するほどの人たから、定めてすくれたる大知識に相違ない。

佛通和尚が飽參の後は、山城の乙訓郡物集女村の永昌寺に住職せられた。この寺は、一條家の香花地ださうだ。いつ頃から此に住せられたらはわからないか、退山は、文化の七年か八年といふことたそれから京へ出で、暫らく換骨堂に居られた。これは、文化の末から文政の初にかけての頃てあつた。その頃は、玄樓はすてに逝かれて、その上足の風外老人が世に出て初められた時で、臨濟の方では、例のやかましい鎌倉の誠拙和尚があり、また心鑑慈照禪師卽ち行應老人か、伊豫の龍潭寺で惡辣の手段を以て學人を鉗鎚して居られた。また眞宗の方ては、長久寺の道隱はすてに遜化せられた後で、名高い石泉上人や雲華上人が悉禿上人の道を說いて居られた時てあつた。

紅は園生に植ゑてかくれんなしで、佛通和尚が京へ出られると間もな

く、その學德ともに世にすくれてあることか知れわたりて、參禮して心要を問ふ者か多い。はては公卿方やの大名なとか多く來てからに、やいの〳〵云ひ出した。そこで、佛通和尚はその煩はしき堪えすして、孤錫飄然として京を去られた。これは、天童古佛の苦口の垂誡や、永平古佛の高躅を思ふてのことてありましたらうと思ふ。

丁度、文政六年に京から攝州へ下り、有馬へ來られて、山のたゝすまひ、水の流れの云ひしらすをかしきを愛てゝ、しばし錫を留めて居られた。時に武庫郡灘村の新在家といふに、柴田某、法號を碧岩院徹底了也居士といふ人かあつて、その邊での物持で、ことに中〳〵の佛敎信者てありましたか、とりわけて、佛通和尚の德に歸依して、つねに傍去らす隨侍して居ましたか、和尚か養老韜晦の處とするために、一寄進でもつて、有馬郡道場村生野山中の幽邃なる地を擇ひ、一宇を建立しました。これか卽ち今の光明寺である。佛通和尚いたくその志をうけられて、之に錫を移し、

碧岩窟と號し、また如何なる因緣かあつたのか、永平第五十世玄透禪師を勸請せられた。この事は、同し年の秋の季であつたといふことだ。

蛇の道はへびの喩、佛通和尙か此山に依つたといふことか叢林へ知れると、雲水どもが我も〳〵と競ひ來つて挂搭を乞ひ、忽ちにして大禪窟となつた。然るに、和尙つねに怒罵瞋拳を以て佛法を作したので、大抵の雲水は、その惡辣にえ堪えすして逃け去つたといふことだ。多くの中でも、佛乘慈儁といふ人があつた。この人か初めて相見した時に、佛通和尙の垂示は、「吾宗有佛祖不傳之秘傳。是什麼。若識得。與老僧相見」といふのであつた。慈儁和尙は、能くよのつねの者には忍ひかたき惡辣を甘ないて、遂に佛通平生の受用底を徹見したる英靈漢で、後には、美濃の龍泰寺に住して、盛に先師の道を擧揚しました。玄樓における風外、磨甎における回天といふても好い人ださうな。

佛通和尙の語句といふものも、今は多くは散逸して傳はらない。唯た自

ら肖像に題した賛と參徒に與へたといふものを得た。自賛は、「順行逆行。間不容髮。如鶻提鳩。似鳩提鶻。要見老僧。指舟罵筏」といふのだ。また參徒に與へたのは、「今朝臘八。天下咸知。黃面熱病。耆婆匡醫」といふのである。この二偈を參究したならば、佛通老漢の活面目を見ることを得るであらうよ。

古宗匠は、向上の一著子のみを旨として、とかく外典やの、詞章やの、筆札やの末技は、一切うちすてゝ、どんとかまはぬものであるか、佛通和尙は、さうではなかつたらしい。筆札などは、とりわけて見ことで、光明寺やまた檀越の家に殘つて居る遺墨を見るに、遒勁にして俗氣を脫してあるといふ話だ。

それに、劍道にかけては、神に入つて居られて、前後左右より打つてかゝつても、その身に觸るゝことか出來なかつた。そこで、三田藩の士どもが、時をり來ては指南を賴む。和尙か此處へ來られたのは、晩年のことであ

り、すでにほけ〳〵しく衰へては居られたが、士とも來ると、笑つて一手二手つゝ指南せられたといふことだ。この事は、この邊の老人などには、能く知つて居る者があらうよ。門外の人かこの話を聞かは、怪しいなど云ふ者もあらうけれと、決してさうではないので、心眼分明の人は、自から劍路にも明かてあるのだ。例の東海老人やの正受老人のことや、また近くは、洞上の風流佛で名の高い尾道の物外和尚を見ても、別に不思議のことはない。

佛通和尚の一代の中に、尤もめつらしいことかあつた。元來この生野といふ地は、山深い處であるから、たそろしい狼も多かつたが、和尚か碧巖窟に坐して居られると、山中の老狼が時々に入つて來て、和尚に花を捧けたり、果を献したりして、その榻側に馴々しくしたといふことだ。これは、この村の老人ともか面のあたり見て語り傳へたので、能く知られてゐる話である。異類の狼も、佛通和尚の德に感して、逢ひかたき佛法を聞

き、に來たのであらふと思はれます。

むかしの宗師は老いたりと雖も寧居逸躰せすといふてござるが、やはり佛通和尚もその通りて、遷化の數月前に山阪を越えて丹後國四辻村法泉寺の尸羅會の請に應し曳錫せられた。その滿戒の日の垂示がある、

「我宗門之戒者、非大乘戒、非小乘戒、最上乘金剛寶戒也、且道、喚什麼爲最上乘金剛寶戒。各々道將來。一人宛穿鑿也」。

佛通和尚かこの碧巖窟に住まれて、およそ二年ばかりも經て、文政八年二月十六日、微恙を示して遷化せられた。その遷化の有さまは、上足慈儛和尚か物しておかれた記文で能く知られる。その文はかう云ふのだ

文政八乙酉歳、攝之山中隱遁處にありて、佛通老漢、二月十日より少病有り、七日目の十六日之夜、師俄に隨徒を召して云く、我化緣盡きぬ順世し去ん。昨夜は佛涅槃、今夜は佛通涅槃と、我等東北にくれ、夢の如く、唯々茫然たり。師又云、汝等三年此處を去らす、專一に辨道すべし。向後

機縁のある處に依隨せよ。佛通に恩を報するに足りなんと。其時、予、近前して云く、何卒、遺偈を示し玉へ。師云、我に遺偈なし。幸ひ古人の末後句之頭有り、適來書せしなり。是我が遺偈也。最早中夜、今行んと、坐定して眠るか如く示寂し玉へり。後師の案頭を見れば、向壁に是の二頌、古紙に書して張付有り。予拜戴して、生涯拜持し奉る者也。佛乘慈師謹記

印(原文のまゝ)

この記文に依つて、佛通和尚か老婆徹悃なることか知れて有りかたい。この古人末後の句といふのは、雪竇、宏智二祖の偈である。我に遺偈なしとて、二祖か末後の句を將つて、直に自家の遺偈に代へられたなとは、恐入つた手段で、佛通和尚の用處も窺はれることである。

佛通和尚の畫像と木像か今も光明寺に存して居る。この畫像は、和尚が在世中に畫師か寫したのであるが、梵容堂々として、その眼稜もすごく、如何にも「虎佛通」と稱せられて、江湖の雲衲か縮み上つたも理りと思はれるといふことである。志ある人は、碧巖窟に佛通老漢の古蹟を攀ち、遺墨や遺容を拜かみて結縁するか好い。

(十二) 物外和尚

物外和尚は、曾て遊方して、同天京璨らの二師と同しく、興聖寺磨甎老人に侍して、洞上の宗旨を究盡し、風流遊戯、よのつね武事をもて佛事を成し、「拳骨和尚」の名大に當時の禪林、士林の間に聽き、諸藩の士の來りて、草鞋を尾之道の栗原に解きて、教をうけたる者、つねに二百人に下らさりきといふ。和尚か武事の神に入りたるを知るへきなり。さて、和尚の逸事は、曾て記したるものなきにあらねと、みな詳ならす。さきの日、加藤君咄堂、西遊の時、栗原の濟法寺に抵り、和尚の舊門の人と會して、その行業記一篇を得たり。題して物外和尚一大鋭といふ。げだし、隨侍の僧の記しおきたる

ものなり。君、余が禪宗史料を蒐集するを知るをもて、之を余に贈りき。之を讀むに、和尚か行事を錄して、頗る詳なり。今一二を訂して此に存す。大狂しるす。

物外和尚出生は、伊豫國松山の藩士にて、實に武田信玄公九代の孫なり、號を物外、法諱を不遜と云ふ。山越龍泰寺檀中城下町傳福寺圓瑞和尚と云へる人、たま〳〵松山道後へ入湯に來り、龍泰寺に逗留中に、物外和尚を見て、徒弟に所望致し、連れ歸りて佛經を敎るに、物覺よく、學文に志ありて、人よりは兎かく秀る所あり。春三月、七歲にて出家し、十二歲の頃より、劒道に心掛け、夜々密かに忍ひ出でゝ劒術を學び、晝は儒者に通ひ、學文劒道、忽ちの間に上達したり。學文と云ふも廣き樣なれども、忠孝の二つを出てず、又武士は切望の義に因て命を殺し、佛道は慈悲を以て人を導びくなりと心を定め、十三歲の冬、國泰寺にて坐禪修行す。十五歲の春の中旬の頃、家中問に手習小供と町人手習小供と道にて言論致し、家中

の小供は、十五歲より十八歲を頭とし、町人小供も、また同し年頃の物を頭としたり、町人小供は、鍛冶屋にて鎗を拵へ、親々へは暇乞し、茶臼山へ出浮はんとす。その親達は如何のことやあらんと心配し、役所へ賴み出で、双方の小供を取鎭めんことを申し出づ。之に依て、町役人、傳福寺へ行きて住持に對面して話あり。この話中に、和尚はそつと立て、線香に火を付け、東司に入りて連番帳を燒すて、何喰はぬ顏にて出で來れり、役人、和尚に申すには、明朝早々役所へ出でられよとて歸る。翌日、和尚、役所へ出るに、役人共、茶臼山の軍裝を問ふ。和尚それは太功記を見て工夫致したりと申す。諸役人これより少しく恐しく思ひ、國泰寺へ諭して、和尚を勘當したり。十六歲の春正月、和尚、大阪に出でゝ借家住居して托鉢し、晝は出でゝ儒者に通ひ、夜は專一に坐禪す。かくの如くする三年、十九歲の冬十二月、ふと日本漫遊を思ひ立て大阪を去り、二十三歲の頃、東海道の府中に庵を結びて修行す。時に龍泉寺と申すに江湖會授會ありて參詣す。

大衆問答ありし時、群集中より墨染の衣に袈裟を掛けて問答に出てし所、助化師は山城宇治興聖寺磨甎和尚と申す師家なり。問答後に方丈室に至り、親切に茶話あり。是に於て、磨甎和尚に從ふて興聖寺に往き、三年の間修行、一日、金剛經を讀みて、無相無我の敎訓に至りて、心恰かも雲霧の晴れ渡りしか如し。二十六歳の春二月中旬、京へ出て尾州に行き、次て江戸に來り、駒込吉祥寺加賀寮に安居す、其の夏、芝近邊に辻切流行の事を聞き、三人組して、夏のこと故、暮方より出て、辻切の者に逢ふて論判す。その中に、その者飛び來りて、和尚に切て掛りしかは、一聲叫んて、小手を取つて投付けたり。又取つて掛りしかは、小兒の如く、輕〳〵と引提け、振り廻はすに、皆々大におとろき、八方へ逃去り、それより芝へは辻切出てさりしとなり。またその頃のことなるか、會津藩の武者修行者、日本橋を通りかゝりし所、肥後の士行き合はし、刀のこじり當り合ひ、大論に相成り、兩人共勝負致度旨願出て、許可に相成り、御堀外に外矢來を構へ、その

内にて上段下段と構へて立上る。双方共に聞えし達人なれは、互ひに隙を窺ひ、暫時位を取り合ひ、やゝ久しく戰ふに、勝負つかす。和尚その中に飛込み、貰ひとなつて和解し、双方大に喜ふ。その頃より、物外の名大に江戸に廣まれり。和尚、江戸にあること三年にして廣島へ歸る。實にその年二十九の秋九月末の事なり。その後間もなく、尾道の濟法寺へ住せり。天保年間のことなるか、大旱にて、諸人難儀に及ひしかば、和尚、辨財天に祈念し、寺の釣鐘を引下し、之を引提けて、吉和村の沖中に投入し、寺に歸りて坐禪入定す。忽ちにして靈驗あり、三日三夜の大雨降りしかは、諸人大に歡ひ、我も〳〵と濟法寺へ參詣し、村方よりは酒樽を引き、献餅を引きたり。この後また大旱の時は、和尚、諸人の乞に依りて祈念するに、必らすその驗ありしとなり。尾道新地海德寺と云ふ寺に大相撲ありし時、和尚の知己、相撲の話致す内に、大關御用木といふ者、物外樣の五體が皆力にても知れたものよと云ひしを、和尚聞きて、御用木、今は何と申したぞと

問ふにされは和尚樣の五體が皆力にても知れたものと申したそれか何と致すと云ふ和尚云ふ、然らは汝能く我か拳を受るか。御用木、入れられよとて、肩をぬきて和尚に向ふ。他の力士ども寄り來りて御用木を留め、奉行出てゝ和尚を和めて引分たり。その時、和尚は、やと一聲叫んて海德寺の表柱を打ちけるに、その拳痕ふかく入りたるが、今現に存して、世人の知る所なり。又嘉永元年、京都より貫名海屋先生下りて、濟法寺へ來りて和尚に對面し、力を出して見せられよと所望ありしに由て、早速に竹林に入り、生竹を引拔きて笹を拂ひ、結ひてたひきに掛け、二百人の門人と試合を打ちしに、少しもゆるまず。海屋、舌を捲きて感心せり。この試合をはりて、船繩をその腰に捲きつけて、四十目取の力士四人に之を引かせたるに、少しも動かざること、大盤石のごとし。四股を踏みつゝ足を進るに、その跡堀れて、牛に鋤かせたるに似たりしとなり。また濟法寺山に大石あり、厚さ一尺五寸、竪一間にて、人夫六人掛りて上けんとする處

を見て、和尚、さても弱い奴かなと、之に莨を卷き、手に抱へて歸り、自ら玄關の前に据えたり。今なほ存せり。和尚、ある時、姫路を通りかゝりて、船の繩につまづきしに、役人ら、何處の僧ぞと尋ねに、尾道濟法寺物外と申すなりと云へは、役人、名高き力者と聞き及べり、力を入れて見せらるべしと申す故、早速、船の大綱をねぢりきりたれば、疑ひもなき物外和尚なりとて、船に呼入れ、家老諸役人に對面し、一日二日逗留して、姫路侯にも謁見し、法話いろ〳〵あり。これより姫路侯より毎年二百石を濟法寺に寄附して、祈願所と定められたり。また越前永平寺に高祖六百年の大遠忌ありし時、越前家の士六人、中雀門より入込みしかば、和尚、直にその襟頭を摑みて投出したり。その後、和尚、國に歸らんとて福井の町を通りしに、前の士ども、和尚を途に待伏せて、手鎗にて突いてかゝるを、和尚、その士を捕へて奉行に引渡す。奉行は、士どもを責め、別に人をつけて、和尚を京都まて見送りたり。その頃、金澤藩の士、京都に逗留中に出會し、碁圍みを

はりて、指篦を入れ合はむとて、士先づ入れむと和尚の手を打つ。和尚云ふ、隨分痛し。然らは我入れん、手を出されよとあるに、士、和尚の顏色のつねならぬに恐れて手を引きたり。その指篦の勢餘つて碁盤を打ちしに、盤は指の痕だけ凹く穿ちたりと云ふ。文久元年の春三月、和尚、濟法寺を出て丶備中松山に往き、門人建次郎の家に逗留して書を讀み、六月の末、雲州松江に抵り宗仙の隱寮を借りて逗留す。たま〳〵伯州より大人來りて、尾道の今辨慶に對面致度と申す。大人身の丈六尺八寸ありて、今辨慶と云はる丶和尚は、丈五尺七寸なり。寺の廣庭に土俵をつくりて立合ふ。和尚、直ちに一聲して大人を空に提け、三間ばかりも打投け、恰かも人形を取扱ふに似たり。諸人大におどろき、よも凡人の業にはあらすなど云ひあへり。かくて和尚の名追々に知れて、來り訪ふ者多し。一日、藩士某、來りて禪宗の事を問ふに、和尚、別席に相見致すと云ふに、某、それは願ふ所なり、明日出直し來るべしとて、隱寮を辭し去れり。その翌朝、某、家來に

鎗をつかし、威儀堂々として來りて法堂に入れは、和尚、曲彔に掛り、侍者和尚、侍香和尚、兩脇に立ち、雲水三十五人立列ひ。先つ和尚より問を始め、心の寶物を持ち來れ、汝と相見せんと云へは、某、茫然として答ふる所を知らす。和尚乃ち起つて、某を脚下に踏みつけ、如何じや〳〵と云へは、某、唯た難有〳〵と云つて合掌し、此に於て、誠心に歸依せり。同し年十一月、和尚、柞築町に抵り、東磨國藏の家に逗留し、日々、藩中の儒者劍客などに會す。ある夜、和尚は、國藏の囑にて、巾二尺五寸ばかりの木額へ守一の二大字を題し、その落款には、例の拳骨を痕せり。やかて又筆を染めて、富士の句「白雲の上何もなし不盡の山」「雲の上も君か御國そ富士の山」「六月は我もはたかぞ富士の山」の三句を題す。兩國造も、物外和尚は格別の僧故對面するとて、十二月朔日、いろ〳〵饗應あり。和尚、發句あり、云ふ「墨染も高間の原を秋の月」國造もまた曙と名つけたる茶碗に歌を添へ、その外、するめ、いか、短冊、奉書一束を贈れり。十二月四日、出雲を出立して尾道に

歸る。土産物は船にて送り、雲州米百俵の外いろ〳〵の品あり。文久三年三月、京都に上り、加賀、薩摩、土佐、尾張、越前等の諸大名に對面し、國事につきて種々の話あり。その頃、寺町を通りしに、金棒を引かせ、十五六人の供人を連れて行く、和尚幸に出合ひ、くせ者待てと云へば、その者も足を留む。和尚申すには、物外は二人なし、何處の者ぞと問へば、尾道物外と云ふ。和尚曰はく、我こそ、尾道濟法寺物外なり、名を盜むとは不埒千萬の奴なりとて、金棒を取たくり、三つに撓めたれば、その者大に恐れ、宿元へ御供申すとて、寺町より和尚の後に隨ひて東本願寺に入込み、種々の話の上にて徒弟となる。慶應三年八月、和尚、長州征伐の高札を二つに切下げ、それに文を添へて泉涌寺の内へ投入る。幕府より尋ねたれども知れざりしとなり。それより大阪へ下り宿屋にて、廣島の野村氏に逢ひ、早速歸國することに決し、十一月下旬、宿を引拂ひ、茶呑船にて荷物を積込み、船宿にて備中國長尾の田邊十次郎に背をうたせつゝそのまゝ遷化に相成

れり。その所へ御祓降り、えいしやないかと踊込みたり。和尚の遺體は、白木の樫に入れ、三谷屋より人足四人にて、三谷屋の墓に納む、七十三歳にて遷化なり。蓋し、此度の上京は、朝廷と長州との間に周旋する爲めなりしとなり。和尚の時事を感じて俳句多し。「君が代や木で拵へた菖蒲太刀」「世の中はひげて治る鹿の聲」「武藏野ははなれ〳〵に時雨けり」。みな人口に傳唱せらるると云ふ。

(十二) 環溪和尚

曹洞は、一萬四五千の末寺と三萬餘の僧侶があつて、なか〳〵大い宗門であるが、宗匠達近年相つゝいで化し去つて、今は寂々寥々として、まことになさけない有さまになつてしまつた。今てこそこの有さまだが、こゝ二三十年前までは、善い宗匠が多くござつて、にぎやかであつたぞ。まつ第一に環溪といふ豪傑があつた。やはり天柱下で、興聖寺同天老人の

門より出た人だか、その器宇の大きなことは、近世一寸その類を見ないよ、それにこの和尚は妙心寺の蘇山和尚につゐて、臨濟の佛法を叩いたから、自然外の曹洞の知識とは違ふた所かござつた。つゞいては坦山、奕堂の二人じや、二人ともに香積風外老人の神足であるが、坦山の方は磊落縄墨に拘らず、奕堂は森嚴の人であつた、また福山堅高といふ人があつた、この人の宗政を料理する手腕は中〳〵うまいものであつたが、或る心黑き坊主の爲めに毒殺されたといふことじや、をしいことをしたね、末には少々變テコなものになつたが、皓臺寺無底和尚の門より出た清拙といふ人がある、さうよ今の鴻雪爪老人のことさ。この人が方外の身を以て、鍋島閑叟、山内容堂、松平春岳などの諸侯を始め木戸、西郷、廣澤、小原、秋月などの諸傑の間に周旋して力を國事に盡したる功は沒すべきにあらずや、何の彼のわる口はたゝくものゝまねのできぬ藝じや、これらはみな近世得がたき器じや、とりわけ環溪和尚には恐入た所行が

澤山ある、一つ二つ話をしやうよ。

これは明治初年の話だか、永平第六十世の大晃明覺臥雲和尚が遷化せられて、その後董を定めるといふので、一宗の老宿が諸國から集まつて相談をしたかの雪爪老人なとも慥かに會した一人であるやうに聞いて居る。時に上座に環溪和尚か居られたか、後董の相談か初まるやいなや、本山には一日も住職がなくてはかなはぬから、仕方がない。いやだか老衲か出ることにしやうよといはれたが、一座相目するのみにて、一語を發する者もなく、水を打つたごとくで、之に否やをいふものもなく、直くにそれなりに後董が定まつてしまつた。環溪和尚のやうな人が出られたのである。自ら知れは、自ら薦むることも、決して忌みはゝかるには及はぬわけじや。

環溪和尚が住職すると間もなく、例の大敕院時代じや。この時は可笑な

こをしたもので、神官と僧侶おの〳〵一人づゝ管長を立てゝ、神佛二教に關する諸般の事を行ひ、共に三條の教則を講して說教したのじや、各宗からも、それ〳〵伎倆のある坊さんを出しておいたが、環溪和尙は、各宗の坊さんを屁とも思はず、小僧扱にして貴樣〳〵といふものだから、坊さん達いま〳〵しいことに思ふて、かげでは彼是言ふたれと、前に出ると、直く身がすくんで、はか〳〵しく話も出來なんだ。そこがそれ器がずんと違つてあるものだから、彼を奈何ともするとなしで、誰れも抑へ手かない。眞宗て詩の上手な松本白華さんなとも、環溪和尙の罵詈にえ堪へすして歸つた一人さ。

高天ヶ原連から出て居たうちでは、平山省齋、田中頼庸なとが錚々たる手合であつた。さすかにこの二人も、環溪和尙にあふては、手出しか出來なかつた。たしか環溪和尙か輪番管長の時たつたが、高天ヶ原連か一番環溪をいじめてやらうといふので、一策を案し出した。それは神社で祭

典を行ひ說教をする時に、坊主共か袈裟をかけて珠數をつま〳〵りながら、神官等と一所になつて、魚鳥の死んだのを取扱ふは太た見苦しいよつてかゝる祭典のをりなとには、坊主にと烏帽子直垂を着せて祭文を讀ましたらどうじやらうかといふ、高天ヶ原連一同に手を拍てそれこそ至極妙といふので、直ぐ使を環溪の所へ遣してしか〳〵と申し通した。環溪和尙が大閉口するかと思ひの外すこしも驚かぬ體で、これは中〳〵おもしろい、一體全體坊主といふ者は、人間の死んだのさへ取扱ふのだもの、魚鳥の死んだをさわる位は、何の仔細もないことじや、又坊主共に烏帽子直垂を着せるとな樗ふことはない着るさそのかはりにお主達が寺へ來た時には、遠慮なく頭をくり〳〵坊主にして法衣を着せるが合點でござらうのと答へたので、使が大驚きで歸て皆〳〵に言ふと、いづれもへこたれて弱つたさうな、おもしろいではないか。環溪和尙は、先づかういふ風で、人を人とも思はず、眼中に王公も貴人もなかつた

から、今の伊藤侯さへも小供扱にされたといふことじやされば、その眼からは平山や田中は蟲ほどにも思はなかつたであらうよ。然しながら環溪和尚が法のために彼我を忘れて骨を折られたことは、殆どその類を見ないね。黄檗宗を助けたことなどは尤も有がたい話じや、多くの人は知るまいから話して聞かさう、この始末は今は牛込で任運騰々老を養ふて居られる高津柏樹老人が昔話をする時は必ず出る一話さ、それはかうよ、維新の初めの薩長政府の方針といふものは舊物破壞で、事の善惡によらず、德川幕府の爲ておいたことは、どし〳〵ぶつこわしに着手した。寺なども幕府に由緒あるものは廢寺にするといふ内規であつたさうで、黄檗なども幕府が建てた寺じやによつて、第一番に槍玉に上るべき方である。おまけに當時黄檗本山の住職もなくて、官邊への應答もはか〳〵しく行かない、黄檗一宗の運命まことや一髪をもて九鼎を引くが如き有さまであつた。そこで一刹も猶豫がならぬと

いふので、本山で、二三の人達が相談の上で柏樹老人を出すことになつた、老人その頃は血氣盛りの時で、本山を泰山の安に置き大光普照の法燈を千古に傳ふるにあらねば死んでも已まぬといふ覺悟で熱心に運動した、その結果やう〳〵のことにて、前に出してあつた幕府建立といふ由緒書を取戻した。なれとも由緒書を取下けたのみにて、また生るとも死ぬとも取留かないので、東京へ來て、各宗の面々と周旋することになつた。何分にも柏樹老人たつた一人にて、何も彼もすることじやによつて埒あかぬ。その困難といふたら、側の見る目も氣の毒の有さまであつた。その時分には、例の雪爪老人か大變幅を利かしたか、大に柏樹老人の爲めに力を添へて、お前の宗門も氣の毒じや、お前も可愛想じやといふて、利益になることを漏らされた。口でいふては人の前かうるさいとて、何時も一寸〳〵と手招きして、指にて壁の上に文字にて示めされるのか例であつた。雪爪老人の盡力もなかなかであつたか、どりわけて環

溪和尚の壺力は一方ならぬことてあつたよ。ある日のことで、環溪和尚ひそかに栢樹老人に向ふて、今日この危急の場合、黄檗一門か浮くか沈むかといふ瀬戸際で、諸般の應接も忙しいのに、お前一人では、どても旨く事か運ふまいぞ。お前を手傳はせるのには、善い人物か一人あるぞ。外でもないやはりお前の本山に居る寶球といふ男さ。老衲は宇治の興聖寺に居つたから、つね〳〵黄檗山へ遊ひにゆき、つひ寶球和尚と懇意になつて、互ひに往來をしたこやつなか〳〵文才もあり、それにしつかりした骨があつて隨分物の役に立つへき器と見ておいた。急にこの和尚を呼ひよせたら如何じやなといふ。栢樹老人、實に仰せのごとく、かゝる時には持て來い。誂向の男で、呼寄せたいのは山〳〵なれとも、誠に殘念のことには費用かない。末派からは出費せす、本山の錢箱は空虛で、私一人の滯在費さへつね〳〵不足勝で難滯をして居ると云ふと、環溪和尚、そのことなら心配せぬかよい。寶球和尚が一人や二人の滯在費用は、老

衲か進上するから、外に仔細かなけりや、急に呼ひに遣れとあるから、栢樹老人の喜ひは言はむ方なく、その旨を本山に通すると、寶球和尚も大喜ひて飛んて來た。これから二人手分して、或ひは官邊、或ひは各宗へと、それ〳〵運動してやつとのことにて、黄檗宗も安全になつたのである。この環溪和尚の恩ばかりは、永く忘却しては濟まぬのさと栢樹老人がこの事を話すことに涙をこぼして居られる。いかさま感入るではないか。

ところがまた寶球和尚は果報つたなき人で、千辛萬苦やつとの思ひで、本山も安泰になつてから間もなく、ふとかゝるめの病氣にて寐たのが根にて芝白金の瑞聖寺で死なれた時にわるい奴が一人あつて、何も彼も賣り拂ひ、寶球和尚が目をつぶるや否や。その寐て居られた夜具までもめくりに來た始末だ。だから中〳〵葬式などの話ではない。この事をまた環溪和尚が聞くと眞ぐに、侍者四五人を連れて飛んで來て寶球和

倘の亡き骸を芝三田聖坂の功運寺へ昇き込んで、自分が導師で立派に葬式をもすましまた墓標までも建てゝ萬事行屆いたことさ。そこで栢樹老人が環溪和尚の所へ禮に來て見ると、佛檀の中に寶球和尚の位牌をおいて香花を手向けてあるといふ次第さ、この時こそは栢樹老人も環溪和尚の厚き志に感泣して涙がこぼれて止めかねたと、この間も栢樹老人がこの事を私に話して居られたことじや。

むかし支那の浮山の遠公が青華嚴を接して洞上の宗をつがしめられたこれは名高い話で御前達も御承知であらう、また宋時代に濟洞兩宗に二人の大宗師があつた一人は卽ち大慧普覺で一人は天童山の宏智正覺さ、この二人は兩大關であつたが、恰かも犬と猿の如くその中が甚だ契はず、大慧はつね〳〵宏智を罵つて默照邪禪といはれた、然るにこの大慧が育王山を主られた時には四海五湖の龍象が集まつて一萬指にも超えたことじやで、中〳〵香積が支ねられない、そこで宏智が平生

積む所の財物を悉く出して之を助けられたので、育王一山の衆みなその濟をうけたといふことじや。これ實に怨に酬ゆる德を以てしたもので、宏智の宏智たる所は取りも直さず此處にあるのじや、遠公といひこの宏智といひいづれもその法の爲めにすること公にして、自分が臨濟宗で他が曹洞宗であると、他が臨濟宗で自分が曹洞宗であるのを打忘れ、人我無明を絕した行に至りてはまことに禪門千古萬古の龜鑑であるが、環溪和尚のこの所行も、宏智や遠公の高躅と共に永く江湖に傳へおいて、後の同根相害する馬鹿な輩を戒めたいね。

水深きにあらず龍あれば則ち靈ありで、曹洞にも環溪和尚の樣な宗匠があつてこそ、元古佛の肉はまだ冷かならずと云はれたのじやが、到頭御遷化せられた、之に引つゞいて奕堂、坦山、堅高、鼎三、奇雲さては顚高、雪鴻などの老宿悉くあの世の人となられて、今は誠にさびしき次第で、元古佛の家風も振はなくなつたね。三百年あまりも前のことじやが、防州

龍文寺の器之爲播禪師といふ人が永平祖塔を拜せられた時に、宗風の太く振はないのを歎いて述べられた偈がある、それは、吾祖自從戢化横、宗風墜地百餘年、兒孫無復英靈漢、誰把鴛膠續斷絃、といふのじや。その後に萬安老人や月舟和尚が出られて二たび振ひ、また次で天桂の樣な大宗匠が起られてます〳〵盛になつて近世まで失墜せなかつたが、到頭また今の樣な有さまにおちてしまうた、殘念ながらまた器之爲播の偈を繰りかへさにやならぬ、さて〳〵笑止なことや。

(十三) 佐野長寛

わが國の美術工藝は、その術大に勝れて、巧智に富める碧眼兒も、よく擬ね得ざるもの多し、漆工の事またその一ならむ。

或ひはいふ、わが國をジャパンと稱することも、實に『漆器の國』といへることを意味して起りたるなりと。こは、いまだ容易に點頭しがたきの說

なりとす、さはあれど、往にしへより、この說のあるを見ても、わが漆器の早くより泰西諸國にもてはやされたるを窺ふに足りぬべし。

さて、漆工の創始を綜ぬるに、遠く孝安天皇の御宇三見宿禰なるものあり、これ卽ち漆部連の鼻祖なり、ついで孝德天皇の世になりて、漆部司を置かれしより、降りて、天武、文武、元明、元正、聖武の數朝を經りて、漆工の術やうや〳〵進み、或ひは五彩の漆を用ふる者あり、或ひは蜜陀僧を用ふ者あり、金銀さては銅に施す者あり、或ひは金を撒せる者、螺鈿を嵌する者、彫木に施す者など競ひ起り、その巧もまた一ならず。これより世々ます〳〵進みて衰へず、室町に至りて、始めて大成したるものゝ如し

室町の將軍は、いづれももろ〳〵の藝術を奬めたるが、中にも義政は、古今內外の武將中には頗希れなる風流を悅びたる人にて、日本唐山のめづらしき器物を集めて樂みき。その頃しも、漆工の名工多く京都に聚りゐたりしかば、義政乃ち之に命じて器物を糅り且つ畫かしむ。こゝにお

いて、工人競ふて力を蘇術に盡し、その製作する所のもの皆めでたく、その
を舊製に比すれば、聖凡相判し、また昔日の類にあらず。
室町の末造よりこのかたは、天下やうやく亂れて兵革頻りに起り、庶民
その堵に安んずること能はざるの有さまなれば、京都および堺浦など
の漆工もいたく振はさりしかど、豐臣氏の天下を定むるに及むで、この
業また盛へき。つぎて德川氏の世となりて、大に奬勵を加へたりしかば、
京都、江戸、大阪、堺浦はいふまでもなし大和の奈良、吉野、近江の栃木、日野
の如き越前の戸口、石見の濱田なども、この業また大に起りぬ。
如上諸國の漆工につきては、今姑らく措きて、その詳なるを說かず、此に
は唯だ京都につきて言はむに、當時京都には、千利休が珠光以來の的傳
宗匠として盛に茶儀を唱へ、多く新樣の茶器を發明し、漆工をして諸器
を製せしめたるをもて、その業大に進みたりき。余三、盛阿彌の如きは、卽
ちこの頃の名工なりき。この二人につきては、五十嵐道甫の如き、山本春

正さてはは中山宗哲、本阿彌光悅、緒方光琳、鈴木庄左の如きの名工、踵を接
して輩出し互ひに巧を競ひ奇を弄しぬ、京都の漆工界その人を得るの
多きこと、實にこの百餘年の間より盛なるはなからむ。
かくの如く、名匠鉅工が濟々たるが中に、また高麗國の名匠張寬の法を
傳ふる者あり、黑漆塗をもて、別に一門戸を張りき。張寬より嫡々相傳へ
て第五世に至りて、忽ち近古殆ごその類を見ざる一鉅工をいだしぬ。わ
が長寬、その人なり。
長寬、通稱を長濱屋治助といひ、姓を佐野氏といふ。寬政の三年をもて京
都新町通三條上る所に生る。實に佐野源左衛門常世の遺胤に出づと云
ふ。名士の後この鉅工を出す、また偶然ならずといふべきなり。
その頃、京都にては、中山宗哲の子孫その業を襲ひて、盛に喫茶家の用ふ
る諸器を作り、名古屋にては、山本春正四世の孫春正が京都より移りて
蒔繪を業とし、江戸にては古滿派の阪内寬齋、沈金彫に名ある二宮桃亭

の如き、井上白齋、原羊遊齋の如き名匠あり、また讃岐には玉楮象谷いでゝ支那製の漆器に基き、竹籠に漆を施して花章を描き大に藝苑にもてはやされたりき。

長寛夙性ことに優れていはけなき頃よりもよのつねの童子と同じからず。父に從ふて塗漆を學ぶといへども、凡工にてその身を終ることを潔とせず。その年甫めて十三歲なる時、その父に語りていひけるは、兒やこの業を學ぶといへども尋常の漆工と同じく、唯だ口腹の爲めにのみ之を作ることを望まず。あはれ、願はくは我をして日本一の名人となしてよとあるに、父ふかくその識見の凡ならざるを驚き且つは悅び、心を用ゐて之を敎へたりきとぞ。後の漆工吏上を照破するほどの人は、その立志自ら幼時より異なるものあり。

長寛すでに長じて、自ら以惟らく、當時の工人はおしなべて目に一丁字なく、書を讀みてその心を養ふこと能はず、日夕たゞ衣食のために勞し、

いよ〳〵下りていよ〳〵俗に趨り、風流韻事の何事なるやを知らず。これ高雅なる物を作ること能はざるゆゑんなりとす。たとひ工人なればとて、書を讀まではとて、師をもとめて詩歌を學び、のち諸國を漫遊する時も、儒士または雅士あるを聞けば、必ず之に謁して敎を乞ひたりきといふ。長寛ほどの者なれば、夙くも自ら漆園叟が謂はゆる「技也進乎道」の理を會したるならむか。

長寛すでに悉く父の秘法を受け、またその頃京中にて名ある漆工を叩きぬ。中にも尤も益をうけたるは、當時の中山宗哲なりきといふ。京中諸家の手段はすでに知り盡したり、いざさらば、此れより諸國をめぐりて、名ある鉅工を問はむとて、行李蕭然、京を立いでぬ。長寛が遍歷にいでたるは何頃なりしやは、今つばらには知りがたけれどおもふに弱冠すぎたる後ならむか。

先づ近き處よりとて、堺浦にいで、紀州に抵り、吉野さては奈良などの漆

工を訪ひたりき。卽ち根來の塗は、船中に細工場を設け、沖合に出でゝ仕事すれば、塵かゝらずして好く、吉野の漆は樹のわかきものを擇びて用ふるが故に、光澤すぐれて好しなど、その場所〳〵につきての工事と、塗漆の要領を得たりきとぞ。當時のならひとて、工人おの〳〵深くその法を秘し、いはく、これ秘事なり、いはく、これ口傳ありと、容易に之を敎へざりしかば、長寛も、思ひの外の日月を費し、他の知らざる苦辛を嘗めたるなるべし。

長寛關西を遍歷し終りて、最後に江戸に來りぬ。たま〳〵御本丸御用の印籠師が紫漆を用ふるを見て、大に之を賞でゝ、いとねもごろにその法を問ひしかども、ふかく秘めて傳へず。長寛そをくちをしき極みに思ひしみて、自ら謂へらく、彼もまた鬼神の術ありて、之を爲すにあらず、我ひとり之を作る能はざるの理あるべきとて、それよりさま〳〵に研究をつみ、竟に自らその法を發明したりき。此において、京都にもまた紫漆の

製作あるにいたりき。長寛苟くも他の長を見て、之を爲し得ざれば已まざることこの一事をもても知るべきなり。

かくて文政の八年に至りて、長寛、京都に歸り、再び新町三條の家に住ひき。實にその年三十五歳なりき。この時、長寛自らその門に標札を掲げていはく「長寛長治どちらでもよし」と。長寛といひ、長治といひ、ばた長濱屋と稱し、治助と呼ぶも、一に汝が呼ぶに任かす。區々たる稱謂は、我が關する所にあらず。唯だ我が技が日本一たらば卽ち可なりの意自らその文字の外において讀むことを得るなり。

長寛この頃より、自ら散髮となりて、髯をも剃らず、衣服は着のみ着のまゝにして、人の之を笑ふも褒として充耳のごとし。曾心の時にあらずむば決して工場に入ることなく、おのが意にかなはざるものは、たとひ千金を積むといへども、之を作ることを肯はず。然かはあれど、常に新樣の器を作らむことをのみ工夫したりき。たま〳〵米醬の乏しきに至るも、

妻如として要へず、妻なる者と相對して和歌を咏み、また人間飢寒のそが身に迫れるを知らざるものゝ如し。

こゝにおいて、長寛の名忽ち京中にひろこりぬ喫茶家さては寥道具家など競ひ來りて新作をあつらへたりしかど、容易に之を許さず、その人雅なれば、喜びて之を肯かひ、その人もし俗ならば、かたく拒みて、贈るに千金をもてするも、決して與ることなし、されば、中には長寛の技倆を疑ひて誹みする人もなきにあらず。

ある時、長寛たま〳〵前川五郎左衛門の家を訪ふこの前川氏は、六角小川西入る處に住ひ、また長寛の家と同じく佐野常世の裔なりといふより、日ころ互ひに隔なく往來したるなり。長寛いつもの如く、案内もなくづか〳〵と座敷に入りたるに、をりしも一客ありて、漆工の善惡など語り、長寛の事に及びて、即ち云はく、長寛といへる男は、酒のみを性命とし、醉ひしれては、箸にも棒にもかゝらぬ所行多し、その技倆もいと拙くし

て、名あるほどにもあらず、他はめでたき名工の如く云へれど、我は然は思はずなど、傍ら人もなげに罵り散らして、而かもそが面前に坐せる散髪弊衣の一畸形の士か長寛その人なりとは知らざるなり。長寛、ほゝゑみつゝ他事のごとく之を聞きつゝありしが、やがて、つと起ちて臺所に行き、急に僕を呼びて大釜にて湯を沸かすことをあつらへ、また座に來り、客に向つていひけるは、いとなめげなれど、臺所に來りませいとおもしろき手品をなして見せまをさむいざいざとあるに、客は何事とは知らねども、そが云ふがまゝに起ち來りぬ。長寛よてその携ふる所の吸物椀を取りいだして、今や釜は蟹の眼を吹きて沸かへりつつあるが中に向つて、悉く之を投入れ、木片もて之を搔廻し初めけり。客は怪みながら、呆氣にとられて見てありしが、良久しくもなりぬれば、また釜の中より吸物椀を取りいだし、そを客の前に臚列し、さて云ふ樣は、座敷にて君が酒のみを嗜み箸にもかゝらぬ男にて、名ほどにもなき拙き者と嘲りた

まひし長寛は、實に我が事にて侍り、またく君が他にて我が事を惡さまに噂するを聞き玉ひて、そが虚實をもたしかめずして、斯くのたまひしことなれば、我また君をば怨まじ、はた怒りもなすまじ。然かはあれど、眞に我を知らずして惡さまにのみ云ひ玉ふは、長寛いたく煩らふ所に侍りき。今や君が面のあたり見たまふ所にて、吸物椀を釜にて煮たりき。金石にあらざるよりは、およそ人の手にて作られたるものいかでこの熱湯にあふて溶けでやあるべき、唯た長寛が塗りたる物は、能く熱湯にも堪ゆるをもて、自ら喜びて獨擅の技倆となせり。君請ふ之を携へ歸りて、明日になりてよく〳〵見たまへ。倘し毛筋ばかりも龜裂あらばその時こそは、我は長寛とも云ふまじ、またこの業をすてかたく盟つて二たび漆を手にせざるべしと氣色ばみてまをしける。客は面前に之を見且つこの言を聞き、いたく愧おて謝したりきとぞ。この事つひに京中に傳はりて、名工の譽とみに高くなりぬ。

また天保六年の春のことか、長寛が親しく行交ふ寥道具屋今津屋某が家に賀筵を開くよしを聞きて、長寛ふと心におもしろく思ひて、いで〳〵君が家の祝に源氏蒔繪の吸物椀二十人前を作りてまゐらせむとて、その前の年より製作を初め、やうやく漆臭の脱けたる頃に、そを今津屋に贈りけるに、常には嘱みても容易に作られざる器といひ、殊に我が家の爲めにとて、わさ〳〵作りくれしといふをもて、某の喜は云はむ方なし。その日となりて客も來り、この椀に吸物を盛りて座敷に並べ、主客の挨拶も終りて、さて吸物の蓋を取らむとするに、少しも動かず、此はといひて一座を見るに、いづれもみな蓋は膠もて身に貼りたるが如く取られねば、某はいと驚き、臺所に下げて蓋を取らむとするに、遂に取れず、詮方なく他の椀にてその日の賀筵はすませしが、あまりの事のいぶかしさに、あくる日、そのよしを長寛に告げたるに、長寛打笑ひやれ〳〵笑止の事かな、能く見てまゐらせむとて、そを取よせて一見し、蓋の糸底に

錐揉したるに、忽ち空氣の通りて、音して蓋の取れたるを見るに、寒き夜を經たるにも拘らず、吸物の汁はなほ温氣を存したり。さすがの今津屋も、その例少き珍事におどろき、厚く謝して、いよ〳〵長寛をたふとみぬ。また蓋の穴は元の如く塗りて今津屋に贈りたるが、その後、嘉永六年、長寛がまた今津屋を訪ひたるをり、前年の話いでゝ、おの〳〵興に入りたれば、長寛、後の紀念にとて、筆とりて外箱の蓋の裏に一首の歌をかいしるしき。その歌、

わが老の拙なき業も後の世に
　またあらはるゝ時やあらなむ

これより今津屋の源氏椀とて名高く、京都名物帳の中に書き入れられたりきとぞ。

長寛平生多く人と交らず、唯だ陶工永樂保全とは尤も親しく往來して、恰かも兄弟の如し。永樂保全といへるは、永樂玉なるものを流行せたる

人にていとおもしろき男なりき。保全は子なきまゝに當時長寛が妻の姙娠中の子を、藥の上より取りて養はむことを約しき。やがて月滿ちて、長寛が妻が男兒を產みおとすやいなや、長寛いまだその妻が兒の顏をも見ず、且つ乳をもつけざるを抱きて直ちに保全が家に抵り、我が妻の乳を呑ませては、我が家の子となるべければ、乳をも呑まさで携へ來りつ。これこそ眞に藥の上より與ふるものぞといひきとぞ。その行おほむね此の如し。

諺にいふ、名人に二代なしと。仁清の後に仁清なく、光琳の後に光琳なし。長寛、文久の三年、享年七十三をもて身まかり、その業もまた一代にて終りて、その子もしくば門人のよく之を續くものなかりしは、實に歎ずべし。然かはあれど、その製作は、永く世に傳はりて、藝苑の鑑となすに足るべきなり。

つら〳〵長寛が言行を觀るに、人品超脫して、決してよのつねの謂は

ゆる漆工にあらずげたし、長寛は、應さに工人の身を以て得度すべき者には卽ち工人の身を現して爲めに說法したるのみ。

(十四) 鐵翁和尙

痛棒熱喝の餘、繪事をもて佛事を成したる者、近世その人に乏しからず、その人品境界の高く塵俗を拔きたるをもてその畫品もまた自づと高くして、筆墨の外、一種言ふべからざるの妙味ありて、到底煩惱妄想の間に頭出頭沒する者の企て及ぶ所にあらず。

先づ近世にありては、筑前博多聖福寺の仙崖禪師のごときは、尤も世に著はるゝものなりき。仙崖、盤谷の惡毒に觸れて玄微を吸盡し、名山に住すといへども、つねに枯淡を甘ない、敝衣垢衲、衆と共に作息し、かたく紫衣を辭みて受けず、庵居の偈に云ふ、「道人境界本隨時、今日豈將明日期有、屋半間借容膝、無齋一鉢乞充飢」その人かくの如し、その畫知るべきのみ。

余しば〳〵仙崖が作る所の畫を見るに、南北に拘せず、形似を求めず、意匠、人の意表に出でゝ、筆墨瀟洒、塵氣を脫し、直ちに鶴林、遂翁の三昧を得たるものあるを見る。仙崖と時を同くして、曹洞に香積寺風外老人あり。老人は謂はゆる狼玄樓の門より出でゝ、森嚴綿密の宗風を擧揚したりき。また近世の老宗師なり、その畫は伊孚九より出でゝ、宋元の妙所を採り、つひに自ら一家を成し、設色水墨ともにおもしろく、その意を用ひたるものにいたりては、世の老畫師といへども、能く辨じ得ざるものあり。近世禪林の繪事を論ぜば、必ず先づ這の二老漢を推して麟角となさゞるを得ざるなり。

さて、仙崖、風外二老が後に出でたるものは、長崎の鐵翁禪師なりき。その水墨の蘭竹は、大に藝林の爲めにもてはやされて、零絹尺紙といへども、苟くも風流韻事を談ずる者は、爭ふてこれを珍襲し、鐵翁の名大に天下に噪ぎぬ。

狀を按ずるに、鐵翁、法諱を超玄といひ、鐵巖と號し、別にまた祖門と稱す、俗姓は日高氏肥前國長崎港の人なり。年稍や長じて、春德寺に入りて、髮をおろして得度す。明治四年十二月七日、世壽八十一歲にて春德の寮に寂す。鐵翁人と爲り、軀幹魁梧にして、梵容凡ならず、白髯蓬々然として胸を蔽ひ、一見人をして畏敬の念を起さしめたりきといふ。

かつて聞く、鉄翁の父某もと大工を業とす。鉄翁もまたいはけなき頃よりも、父に從ふて之を學ぶといへども、動やもすれば、暇をぬすみて、物の形象を描き、自らそをこよなき樂となしき。父しば〳〵之を叱するも、つゆ顧みず。たま〳〵吳周藏なるものあり、通稱を豊三郎といひ、楓山また、は、黒酣と號し、畫を善するをもて名ある韻士なりけるが、鉄翁の爲す所を見て、ひそかに之を奇とし、いまだそれと人にも云はざりしに、周藏の妻もまた同く之を奇なりとし、よて周藏に勸めて這の童子の畫を好むこと、天性に出でたり。そを抂げて大工の職に朽ちしむるは、いと惜むべ

き、の極みなり、善き師をもとめて畫を學はしめたらむには、のち名ある者ともなるらめといへるに、周藏げにもとて、直に某に諭して、大工を捨てゝ畫を學ばしめたりきとぞ。されば、周藏夫妻は、鉄翁が第一の知音底とも云ふべきなり。

この時に當りて、たま〳〵清國吳門の江稼圃、商舶に搭じて長崎に來りき。稼圃、南宗の典型を奉し、彼の國に名あり。鉄翁すなはち贄をその門に執り、刻苦して倦まず、悉くその傳を獲て、善く山水花卉を寫し、もとも蘭竹を巧にす。これより先き、我が日本人の南宗を學ぶ者いと多かりしかど、率ねみな畫論を斟酌して、そを摹倣するに止るのみ。その彼の國人に親炙して、能く衣鉢を受けたる者は、實に鉄翁その唱首ならむ。

如何なる因緣のありけむ、鉄翁が稼圃に就きて、未だ幾はくもあらず、長崎港馬場なる春德寺に投じて出家しぬ。思ふに、その人自ら高くして、世緣の控勒を受るを屑しとせざるに由るか。此において、畫禪並び修して、

いよ〳〵その三昧に入りたりしがもとも鐵門鐵舟などの畫蘭を喜びたりき、その自ら鐵翁と號したるもまた〳〵私淑する所ありたるに出でたるなるべし。

けだし、鐵翁の蘭における、晝夜工夫して已まず。ある時、某家の盆蘭を落ふるを見て、愛玩して措かず、眠食兩ながら廢し、遂に疾を得るに至りき。かつて一夕夢に異人の蘭一莖を采りて授ると見て、忽然として、その向背正側の法を覺りぬ。のち二十年を經りて、清舶また〳〵有山堂畫譜および惲道生畫譜を齎らせたるが、その書中にまた此の法ありきとぞ。その造詣する所、自づと古人と暗合したるなり。

鐵翁、門人に語りていはく、蘭は是れ賢人君子の性情に適するものなれば蘭を寫すを以て樂みとなすときは、則ち賢人君子を尚友するに異ならず、且つ其眞意を了知するに至れば、胸襟自から瀟洒にして、能く法味を諦め心思安靜に至ることを得べし。何となれば蘭は固より知を人に

求めず、常に幽谷に在て香氣馥郁たり、人其清潔なるを以て、之を愛玩して措かず、故に古來心趣高逸なる者は、概ね幽蘭の寫意を以て樂みとす。」

鐵翁が蘭を畫くの微意すなはち窺ふことを得べし。これその畫の直ちに鐵舟の高躅を攀るものにして、よのつねの寫生家の手段と一樣の看をなすべからざる所以のもの此にあり。

鐵翁がその年四十に達する頃には、畫名大に噪ぎ、木下逸雲、帆足杏雨と併せ稱せられて、九州南宗の三哲と呼ばれたりきされど、鐵翁はこの二家と併せ稱せらるゝことを喜ぶべきか。おもふに、横さまに點頭することあらむ。相傳ふ、田能村竹田、長崎に遊びて鐵翁を訪ふ。鐵翁、歡び迎へて、之を座に延き、一揖していはく、久濶恙なし、萬福々々と。竹田その意を會せず。鐵翁、起て竹田の肩を掷ていはく、前生つねに相從ふ、今之を忘れたるなとて、相共に大笑す。けだし、竹田の畫は蓋北苑に類し、鐵翁の畫は、巨然に似たり。北苑は竹田と同じく處士にして、巨然は沙門なり。緇素相異

なりといへども、共に南宗の典型を守りて一時を振作し、彼此頗るその迹を同じくするものあり。前生つねに相從ふの一語、實に這の意を指すものにして、鐵翁が抱負の存する所を看取す。

然かあれば、苟も南宗を學ぶ者は、みな競ふて長崎に來りて、ねもごろに鐵翁が慈教を乞ひたりき。彼の貫名菘翁のごときは、山陽沒後の京都藝苑に主盟たりし人にて、繪事に耽りて、ひろく各家の畫論畫譜を閲すること多きも、なほ鐵翁の門を叩きて、稼圃の口訣およびそが自得する所を叩きぬ。日根對山、南宗の畫をもて、高く自ら標し、つねに一世の畫家を罵倒したりしかど、ひとり鐵翁に對しては、誠を傾けて教を求めたりき。その他、京都の前田半田、中西耕石のごとき、大坂の金子雪操のごとき、江戸の安田老山およびその妻紅楓女史のごときも、みな特に來りて厚く禮して口訣を受けたりき。當時の南宗畫家の推重する所たりしを知るに餘りあらむ。

鐵翁、その門に入りて畫を學ばむとするあれば、必ず之に誡めて云ふ「汝ら畫を學ばむと欲せば、錢舜舉の謂はゆる「要得無求於世不以贊毀撓懷」の一語を以て、その座右に銘せよ。然れども、この語に徹底して實踐することは、太だ容易の事にあらず。眞に徹底せむとせば、須らく先づ胸中一點の俗氣を留めずして、能く修錬するときは、心手自然に圓熟して、知らず〳〵妙致に赴くことを得べし。是れ卽ち明來りて暗去るの道理なり。苟くも至誠あれば、君親交誼の際みな眞理に適ふ。若し之に反すれば、たとひ碩學多識の士といへども、その說行はるべからず、故に繪畫に從事する者もまたその心を至誠に致し、專一に修練して、運筆精熟に至るも、毫も傲慢の心を生ずることなく、謂はゆる悟後復一と云へる要語を玩味し、自己に反求して、邪心を防がざるべからずと」何ぞその言の老婆徹悃なるやゞだし。鐵翁は、心田を開拓するをもて、學畫の第一義諦となし、筆墨の外に別に法あることを示したるものなり。

また近世南宗の諸老を月旦して、その享拜する所を知らしむ。いはく、「岡田半江は、初學の時より、其父米山人に從て、能く南畫の安心を了得し、更に名家の妙蹟を愛慕せしを以て、遂に畫理の上乘を悟り、其體一變して、父の上に出で、嚴然たる一大家を爲せり。是れ六要に謂ゆる師學短を捨るの遺訓に適ひたるもの乎。又釧雲泉、高久鶴崖、渡邊華山、椿々山の四家を以て。近代東國南畫の稱首と爲すと雖も、其能く眞に臭氣を脱したる者は、華山及び椿山なり。此二子の花卉翎毛元と南田秋穀の間より出で、而して翎毛に至ては、特に南田に近し。華山は、其筆、天資强健、氣運生動。晩年に至りて、廣く各家の長を了得し、花卉、人物、翎毛、山水等都て筆に虛飾なく、繁簡共に之を善くするのみならず、頗る節義の氣象に富めるを以て、精神勃々として充滿し、筆力强勁なりと雖も、而も覇氣を帶びず、眞に自然の性情を寫出すことを得たり。池大雅の如きに至ては、曾て清人伊孚九を慕ひし時は、其畫正しくして、精神雅趣共に備はりたりしが、後に

一變して異風を生じ、遂に放逸の筆と爲れり、今之を華山に比するに及ばざること遠し。」華山を以て直に東國畫家の上乘となし、大雅の上に在りと道破したるは、一隻眼を具するものと云ふべきなり。

世の南宗畫家と稱する者は、たゞ輞川、衡山らをのみ享拜し、北宗の畫に至りては、殆ど之を顧みず。されど、鐵翁は、能くその妙の存する所を知り、しば〳〵門人に向て之を語りたりき。その說にいふ、「雪舟雪村の如きは、天資筆妙を具有せしものなり。殊に雪舟は、曾て漢土に遊びて、墨趣渲染一層の妙を得たり。其雅致固より彼の曾我派の如きものと日を同ふして語るべきものにあらず、而して其派を異にして特に名家と稱すべきは、土佐家に光長光起あり。又近世に及で訥言あり。狩野家に元信あり。皆人物を畫くに長せり。殊に等殿山樂の着色人物の如きに至ては、漢土の趙仲穆と壇上に馳逐して相誇るに足る。其他、探幽以下、名家と稱すべき者五六輩あり。光琳も亦た狩野家の門より出で、豹變して一家を爲す。其

畫穩和にして精神あり、筆を下すこと簡淡なるも能く整ひ、沈着にして雅趣を具ふ。其着色の奇異なるは、是れ蓋し清人蔣南沙着色の法に依て、更に一機軸を出せしものなれば、其品格賤しからず、固より一種の名畫と稱するに足れり。又英一蝶が如きは、狩野の末流なりと雖も、自然に悟る所ありて、寫意を了せしものにして、其筆活動雅趣を具ふ。故に北宗諸派の人と雖も、自ら一悟を得たるものは、皆是れ名家と稱するに堪へたり。然るに己れ南派に在るを以て、一概に之を擯斥する者は、未だ自ら畫理に明かならざるが故なるのみ。豈に慚愧せざるべけんや」また圓山派を評していはく「應擧は元と一寫生の家に過ぎずと雖も、曾て南北及び院體の畫風を兼修すること數年にして、乃ち一家の風を爲す。其畫非凡なるを以て、京攝の畫家雲從して之を師とす。就中、蘆雪の如きは、超凡拔群なり。筆勢の縱横活潑なること天性に出ると雖も、曾て應擧の門にあるの日、鯉魚の潴水に游泳せしを見て、忽ち機發を得、一躍大河に跳り入

るを見て、廓然として一悟し、乃ち一機軸を出して、筆力益々活動し、大に時人の賞する所となれり。然れども尙覇氣を免れざるものあり」「崎陽の俗、日夕相接する所の者は、多くは來舶の清人にして、目に觸るゝ所は、おほむね南宗末派の繪畫のみなるをもて、そをもて繪畫の上乘となして、南宗にあらざれば、繪畫となさゞるがごときの有さまなりしかば、老婆心切、特にかくの如くなる所以なり。

鐵翁もその年八旬に迫り、ほけ〳〵しく衰へにければ、やうやく硯に打向ふことさへ倦みて、多くは人の需をも辭みたりき。爐屏と題していはく、「正直にして天理に通し、慈悲を以て能く人に施す。無欲にして足ることを知る。平日行事正しくして邪なく、物を愛して執せず、俗塵凡情、一點もなき之を古人の風流と謂ふ。世の雅人、今時一人も有ることなし。故に門を閉て、人の來訪を許さず、我德名の高きなし、高名を願はず、適意に養ふに拙を以てし、天然を了せんと欲する耳。我、人の師と爲らず、人、我を學

ぶは卽ち狂人なり人我が狂を學で我が心を學ばざるが故也」これ沼々たる世上の士が手に翰墨を弄しつゝありながらも常に利名の間に頭出頭沒するを慨して發したるの語ならむかつ他が我を學ぶを斥けたるが如きは葉門の風流佛月海老人が他の賣茶を學ぶを喝したると同じ意なるのみ。

元治慶應の頃にいたりては、幕府は政を失ひ、外舶は來り迫り、世はかりなと亂れ果てゝ、志ある士は競ひ起て國事に奔走す。此において、鐵翁殆んど手に筆硯を絶ちたりき。丙寅の事なりとか、久留米の藩士某なる者、春德の門を叩き、鐵翁に就て畫を學ばむことを乞ふ。淵泉ためにその由を鐵翁に通ず。鐵翁いはく、某は繪事をもて藩侯に仕ふる者なりやと問へ。淵泉その命のごとくす。某答へていはく、僕が家もとより畫家にあらず。藩侯夙に老師の德を慕ひ、特に僕をして來りて學ばしむるのみ。淵泉また之を鐵翁に通ず。鐵翁いふ、汝更に某に報じて云へ、老衲頃日病あり、

子が乞に應ずること能はずと。淵泉ゆきて某に告ぐ。某いはく、謹で命を聞く。然らば幸に老師の一畫蘭を得て、藩侯に復命せむ。鐵翁また謝していはく、病間筆を援るに懶し。某いふ、願はくは、病床に就て一謁を賜はらむことを乞ふ。鐵翁つひに許さず。某怏々として去る。この後また來りて刺を通ずること數回なるも、鐵翁かたく應せず。一日、某、鐵翁の起床するを見て、俄に來りて謁を乞ふ。鐵翁、淵泉をして之に應せしめていはく、老衲今日起床すと雖も、いまだ人に接することを欲せずと。某、大に望を失ひ、詩一章を出して和を求む。淵泉これを携へて鐵翁に呈す。鐵翁、一閲していはく、老衲元來無學にして、詩歌俳諧、一も之を解する能ずと。某すなはち憤然として怒り、刀を按じていはく、僕、鐵翁の德を慕ひ、遠くこの地に來りて、精舍を訪ふこと數回、一として、僕の望を容れず。今日、起床動作、常に異なることなくして、而かも謁見を拒むは、何の故ぞや。汝之を鐵翁に問へと、辭色頗る決する所あるもの丶如し。この時、淵泉、年なほわかく、

直にその言を鐵翁に傳ふるを怕れ、之を同門の煌園に讓る。鐵翁、神色自若として騷がず、冷笑一番していはく、老衲もとより畫師にあらずと雖も、少しく繪事を解す。今かたく之を辭するものは他なし。今や天下多事、士はみな武を講じ兵を錬り、日もまた足らず。平生文字をもて業とする者と雖も、また筆を投じて劍を學ぶの時に當て、彼却て畫を學ばむとす。老衲這の不忠不義の士に面することを欲せず。彼もし老衲を及せむとせば、何ぞ一命を惜まむや。老衲が首は得べし。老衲が蘭は得べからずと。某すなはち大に悟り、罪を謝して去りにきと云ふ。由來、老宗匠の面目、容易に窺ふことを得べからずむかしは、土地神、洞山の面を拜せむとするも、その機を得ずたまゝ僧の洗米の次に面色を變ずる時に當て、僅かに之を拜することを得たりと。余、鐵翁においてまた云ふ。

鐵翁の畫名、天下に傳はり、衆口みな推して、近世南宗の名手とす。然かはあれど、鐵翁の鐵翁たる所以のものは、別に存する所あり。たゝ兎毛餘沫のみを認めて、鐵翁の眞面目とせば、その人を千里の外に失せむ。

(十五) 圬者長八

圬者長八は、也た是れ近世の一名工なり。ふかく心を禪要に寄せて、豆州龍澤寺星定和尚の痛棒を喫し、頗る省發の處ありきといふ。長八の行事、頗る世に傳ふるに足るものあり。

長八、姓を入江と稱し、通稱を金兵衛といひ、天祐と號す。文化九年七月をもて、伊豆國賀茂郡松崎村に生る。父を兵助といひ、母をてこ女と呼ひ、農を業とし、勤勉をもて閭里に稱ありきといふ。

泥鏝の術にかけては、近世希有の名工と仰かれ「伊豆の長八」として、その名を天下に轟かすほどありて、晷垂るゝ頃よりも、太く鏝を持つことを好みき。その年の十二になりける時、遂にそが父にたのみて、當時の名工と稱せられたる關仁助といへる者の弟子となりぬ。

幾ほどもなく、長八、その技大に進みて、師なる仁助も舌を捲くばかりなりき。十六七の頃にや、松崎淨泉寺の壁にさま〳〵の畫を作りけるが、いと巧に成りたりとて、見る者みな驚かさるはなし。また雛人形を作り、或ひは凧の畫などつくりたるが、いつれもみな一種の奇氣ありて、をかしとてもてはやされたりきとぞ。そのわかき時より意匠に富みたるを知るべきなり。

長八やがて弱冠にも迫りたれは、自ら振つて思惟すらく、業を攻め名を揚くるは、天下の大都にいでゝすべし。猫の額ばかりの松崎にありて、朝夕、魚鰕あさる里人の間に老いては、たま〳〵に男と生れたるかひあるまじきそとて、急に行李を脩めて江戸に出て、埒者の頭領なる源太郎なる者に依る。實に天保元年の事なりき。

さて、長八つく〳〵思ふやう、畫は百工の母といへは、先つ之を學はでは、わが業の精しきにいたりかたしとて、贄を狩野氏の門にとりて、またそ

の名を乾道と稱しき。他日、長八が繪畫を泥裝するをもて一家を成したるものは、實にこの狩野氏に學ひたるに胚胎したるならん。

天保の末年、茅場町藥師堂建立の事あり。その堂、商家軒を列ふるの間にあるをもて、火を怕れ、悉く泥を塗らむとし、その工事を擧けて、頭領源太郎に托す。時に緣日すでに迫りて、僅かに數日を餘すのみ。源太郎すなはち思ふ、數日にして工を竣ること、尋常工人の企て及ふ所にあらす、たゝ長八のみ能く之を爲さむと。たま〳〵長八繪畫をもて川越に遊ふ。急に之を招きて之を囑し、その言いとねもころなり。此において、長八また再ひ鏝をとりて、御拜柱を塗り初め、忽ちにし一柱を仕上をはりぬ。他の二人は、數日を經て、いまた一柱を仕上ること能はす。二人乃ち大に長八の伎倆を嫉みてひそかに之を殺さむと欲りし、之を源太郎に謀る。源太郎もまた之をうべなひ、その工を竣るを待つて、事を擧けむとす。すでにして、源太郎、飄然として悔ひ、且つ二人の者を諭せしかは、二人大に之を悔

ひ、遂に長八をたふとひて義兄とす。此において、長八の名とみに都下に噪きぬ。

はじめ、長八の河越より歸りて源太郎の家に至るや、源太郎たま〳〵外に出でゝ在らず。よて肝煎某に面す某、長八の技を疑ひ、先づ龍の下彫を畫かしむ。長八細筆をもて之を作る。某、肯はず、更に花紋の下畫を作ることを命ず。長八、その沈塗なるを聞き、太く之を作る。某また肯はず、長八を斥けてその器にあらずとなせり。源太郎すなはち長八を招きて龍の仕上を畫かしむ。長八、唯々として之を作り、頗る精巧を極む。源太郎、大にその技に服し、問ふに肝煎の言をもてす長八いはく、龍は浮畫なるをもて、下畫細ならざればその形をして大ならしむるの虞あり。花紋は沈塗なるをもて、太くせざれば、その形をして小にせしむるの虞あるに依るのみと。源太郎ふかくその言に感じ、遂に肝煎の言をしりぞけて、長八に囑するに御拜柱の仕上をもてしたりきとぞ、

この後、長八技いよ〳〵その神に入り、專ら繪畫を泥裝するをもて業とし、花瓶、畫額などは、殊にその巧を極め、またそが中にも、龍にいたりては、みな推して獨擅の妙術となしき。世人爭ふて之を求めたりしかど、漫りに之を作らざりきといふ。

長八、配を迎ふること二回、みな子なし、某氏の子竹二郎を養ひて、そが家を嗣がしめ、明治二十二年十月八日、東京深川八名川町の寓居に沒す、享年七十有八。淺草松葉町正定寺に葬り、法諡を仰譽天祐乾道居士と稱す。」長八、少壯にして學をなさず、老いて之を悔て、刻苦して文字を學ひ、その兄弟子某の由緣を求めて、目黒の祐天寺にゆきて、佛乘を聽きぬ。のち專ら心を敎外に寄せて、明治九年はじめて龍澤寺の星定和尙に相見し、大にその德に服し、遂に龍澤に寓し、日夕、星定に請益し、居ること三年、大に得る所ありきと云ふ。長八の龍澤のあるや、星定の恩を報せむが爲めに、星定の壽像および不動尊の像を作りて、そを法堂に安置す。

(十五) 翰墨因緣

功名富貴を一擲して、紛々たる兒童の爭ふて攪るに任かせ、淡然泊然、三軍を叱咤するの勇を韜晦し、姓名を收拾して、名山の裡に潛み、翰墨三昧をもて老を樂み、任運騰々、その身を終らむとす。謂はゆる英雄囘首卽神仙なるもの是れか。

余しばゝ隱逸傳を讀みて、往にしへにその人あるを知る。以惟らく、大雅の地を掃ふたる今日また此の如き人を求むべからずと。何ぞ知らむ、我と世を同じくして這の風流漢あらむとは。

むかし三河國松平村に林藤助といふ隱士あり、清貧を甘ないて、友とする書の外はずべて調度の煩はしきを厭ふ。人ありて祿仕を勸むといへども、かゝる刈菰とみだれ果てたる世に、口腹の爲めに膝を折りて人に仕へむやとて、頭を掉つて敢て承ることなし。

紐に同じ村に德川氏(家康の父なりともいひ、或るは祖父なりともいへり、たしかには知らず)なる者ありけるが、夙に文武に通じ、天下に覇たらむと欲りする志ありて、おのが衣食をわかちてより〳〵士を招き居たりしかど、時その時にあらざれば、深く韜みて發せず。たま〳〵藤助の志の淸きを知りて、實やかに約りつゝも、たがひに往來して、文武の事など語りあひて、樂とはなしぬ。

いつの歳の暮の晦日にやありけむ、大雪ふりたれば、德川氏、今日は野狩に出でむもいと懶し。藤助を訪らひて年忘せむとて、その妻なる者と子とを携へて林氏の門を叩く。藤助喜び迎へて、かゝる雪の中をも厭はで、能く訪ひ玉ひしぞや。薄くとも酒をまゐらせむとて、簑をかつぎて外に出でゆきけるが、やがて一頭の兎を提げて歸り、今日は鮮らけき魚を求めて君をもてなすのすべもなし。山の物にてゆるさせ玉へと、その兎を羹にして、かたみて村酒を酌みかはしつゝ、その日を暮らしつ。德川氏夫

妻この日の饗應を又なく喜びてつねづねかの日ばかり樂しかりしはなかりきと語りき。後に至りて臘月晦日には必らず兎の羹を食ふことをもて、永く德川家の嘉例となせりき。是れ卽ちこの日を記する爲めなりきとぞ傳へし。

さて、德川家康の世に及むで、初めて父祖累世の志を遂げて天下を握り、その業を成すに績ありし家の子さては由緣ある士どもをも悉く招きよせて祿をとらせたるが、また林氏との舊誼の忘るべからざるを思ひ、いとねもころに召したりしかど、藤助かたく子陵の節を抱き、盟つて江戸に來らず、可惜許、文武の材を有ちながら、松平村の埋木となりてその身を終はりぬ。德川家康もまたその志を奪はず、そがまゝに任かせおきたりしが、家光の世になりて、强ひて藤助の孫某を召し出して五千石を與へ、之を旗下の中に列せり。

その後、林肥後守なる者に至りて、上總國貝淵一萬石を食みて、將軍の御

側取次を勤む。此において、林氏の門大に賑ふことゝはなりけり。肥後守死して、その子播磨守一道封を襲ふ。一道よろづみやびたることを嗜みて、文武の餘、狩野晴川につきて繪事を學び、好みて鷹を畜きたりしが、後にはその精はしきに入れり。

一道の後、貝淵を領したるは、今の林忠崇なり。忠崇、嘉永元年七月二十八日をもて生れ、幼名を昌之助といひ、別に一夢と號す。卽ち一道の第二子なり。忠崇、天性穎脫の氣ありて、他の肉食者の子弟と同じからず、夙に幕府の奧儒者成島良譲(桓之助と稱す、成島司直の養子、柳北の父なり)に就きて文學を俯め、武事は、一流の奧儀を究め、能くその前に當る者太だ希なりきといふ。

忠崇もまた父一道の氣質をうけつぎてや、齠垂るゝ頃よりも、繪事をよろこびて、贄を濱町なる狩野董川の門に修めて學びけるほどに、その妙に入り、わきて鷹を畜きては、その乃父にも優りて、筆力剛健にして、而か

も俗氣を帶びず宮本二天の風ありと稱せられぬ。その頃は、今の狩野友信も年わかく、濱町の若先生として、父の門人を督したるが、忠崇これと交を納れて、畫を闘かはしつも、日ごろ隔てなく往來しき。

さるほどに、三百年間六十餘州を靡みしたる德川の威風も漸く競はず、米國水師の來りしよりこのかたは、海內亂れて麻のごとく、勤王討幕の說大に起り、ついで伏見鳥羽の戰となり、幕軍大敗して、前將軍慶喜東走す。德川譜代の諸侯らも唯だその家のみをきづかひて、手を袖にして、觀望し、まだ德川氏の爲めに謀るものなし。忠崇ひとり德川氏の事日にます〳〵非なるを見て、悲憤の涙に袖をしぼり、ひそかに劍を磨きて、その機の乘ずべきを待ちけり。

明治元年三月、西鄕隆盛、總督府大參謀を承り大軍を擁して東征し、本營を駿府に駐む。時に輪王寺宮、東征の軍を途に止めむが爲に、東海道を下りて小田原にあり。隆盛乃ち宮を說き奉らむとて、部下の將中村半次郎

(桐野利秋)三好軍太郎(今の三好中將)らを使者として小田原に向はしめ、また渡邊淸左衞門(今の渡邊男爵)を呼びて曰く、今や中村、三好らを小田原に遣はしたりと雖も、小田原藩の向背未だ明かならず。小田原藩また官軍に抗せずとするも、德川旗下の士の戰はむと欲する者ありて箱根を守らむには事太だ容易ならず。箱根は天下の險なり、一夫關に當れば萬卒も超ねがたし。若し敵の此に我を遏むるあらんには、中村らを見殺にするのみならず、錦旗或ひは相武の野に入りがたからむ。子須らく一隊の兵を從へて、早く箱根の關を奪ひて我を待てと。淸左衞門大に勇み、その夜直ちに大村藩士五百人を率ゐ、松明を燒きて三島を發し、その翌朝、箱根の關に達す。關吏狼狽して爲す所を知らず、その云ふがまゝに關を致して去る。淸左衞門乃ち因州藩士中井半五郎をして關を守らしめ、自らは更に隆盛の意を啣みて小田原に向ひき。德川氏が關西三十餘國の兵を防ぐに足るべき箱根の險は、かくの如く一刄をも血ぬらさずし

て官軍の手に落ちぬ。

これより先き、林忠崇、貝淵に在りけるが、西郷隆盛の大兵を擁して東し、沿道の諸藩之を遮り遏るものなしと聞くや、大にそのいひがひのなきを憤り、かつ云ひけるは、官軍をして箱根山を超えしめたるの時は、方さに是れ徳川氏の滅する時なり。たとひ將軍が恭順を旨とせらるゝも、三百年間の恩をうくる者は、之れを傍觀し去るべきものかは。我之に當らむ。されど累を將軍に及ぼすがごときは忍びざる所なりとて、封一萬石を擲ちて藩籍を脱しぬ。當時之を聞きて、舌を捲かざるものはなかりき。」

忠崇、藩士らを集めて、そが思ふところを告ぐ。辭氣慷慨、聲涙共に下る。衆大に感激して從はむことを請ふ者太だ多く、遂に三百人を得たり。乃ち之を兵船數十艘に打乗せて上總を發し、明れば恙なく相模國鶴崎に達しぬ。

先づ使者を小田原城に馳せて、箱根を守るべきことを說かしむ。いくほど

なく、使者歸りて、箱根はすでに官軍の手に落ちたるよしを語る。忠崇、足ずりして、いひがひのなき小田原かな。天つひに我が德川氏を滅ばさんとするかと歎きしが、さてそのまゝに已むべきにあらねば、更に心きゝたる使者を小田原に送りて、見す〳〵官軍に箱根を奪はれたるを責め、かつ我は今より熱海街道をたどりて三島に出でゝ箱根に迫らむ。貴藩は、急に東より兵を進めて上り、東西より官軍を挾擊せむ。さあらば、或ひは再び箱根を取もどすことを得べきか。もし貴藩が德川氏の恩を忘れ義を無みして敢て官軍に從ひ我言を用ひずむは、我は箱根を後にし、先づ小田原城を略し、此に據つて官軍に當らむと、その言太だ嚴かなり。小田原藩は、官軍と林勢の間に挾まりて、いたく困じ果て、老臣ら首をあつめて相議す。林氏の言を却けむか、小田原城は、直に奪はるべし。さればとて公に官軍を擊つこともなるまじ。今は蔭になりて林勢を助くるより外には好き策もなしといふもの多きにぞそのことに決して、その旨を

使者に通じぬ。忠崇さらばとて衆を督して、熱海より韮山に出でゆくゆく同志を募りて、無慮六百人を得たり。忠崇大に喜ぶ。

時は三月の六日、朝まだきに西より攀づ。朝霞は深く垂れこめて遠を見えわかず、聲をひそめて關所に達し、すは此時ぞと幕直に攻よせぬ。官軍の隊長中井半五郎、今頃に敵の來るとは覺えぬに、いづくより來りしぞとあわてふためき、衆を勵ましして防かむとするに、忽ち箱根權現の森陰より鐵砲を打出すこと雨の如し。こは如何にと見てあれば、小田原藩士が浮浪の如く姿を變へて林勢を援るなりけり。半五郎大に怒り、心きたなき小田原藩かな、いで因州武士が腕見せむと、て三百人を二手に分ち、力を竭して之を拒ぎしかど、敵は目にあまる多勢なり、背には小田原藩の兵あり、中〳〵之を拒ぐべくもあらず、或ひは打死し、或ひは傷きて湖中に投じ、或ひは走り、半五郎もまた敵丸に仆れ、今は官軍一人をも見ず、忠崇乃ち入て關所を奪ひて、高く鬨聲を擧げぬ。

この夜は、月しろも隈なく照りて、湖水に映りたる、その眺めのおもしろきに、忠崇、劍を横へて之に對し、感慨湧くがごとし。よて、懷を述べて詠みいだしける。

くもりなき心や見せむあすの夜は
　かはねも露に照らす月かげ

忠崇が當時の意氣おもひ見るべし。抑も忠崇がこの時は、その年僅かに二十歳ばかりなりきとぞ。さるに、その智略のたゝならざるは官軍も語りつたへて賞めたゝへしとぞ。

林忠崇が先きに韮山より三島に向ふや、早くもその事を駿府に告る者あり。西郷隆盛乃ち河田左久馬を呼びて曰く、幕府の士が箱根に向ひたると見えたるぞ、子急に行きて渡邊、中井等を援けて關門を守れと、よて長尾備三藩の兵若干を授く。左久馬、唯々して直に駿府を發して三島に抵る。時に林勢すでに箱根に向て上りたるを聞き、今は一刻もためらう

べきにあらずと、士卒を急き立てて〳〵進むほどに、關門は、すでに林勢の奪ふ所となりて、その旗高く風に飜がへるを見る。左久馬大に怒り、二たび關を取るにあらずむば、斃るゝも遂くとなかれと、士卒を勵まして、急に關門に向つて攻めかゝりぬ。

かくまでも早く官軍の來らむとは、忠崇も思ひ到らざる所なりき。然かはあれと、貝淵を出る時よりも、かねてなきものとあきらめたる身なり。戰は幾たびも辭せざる所なり、いざ力のつゝく限り命のあらむ限りは、と、備をなして挑み戰ふ。

また先きの日、箱根を下りたる渡邊清左衛門は、小田原藩の向背決せざるをもて、一時、湯本に陣して形勢を窺ひつゝありしが、因州藩の兵は箱根より逃れ來りて、事の始終を告げたるにぞ、清左衛門大に驚き、いみじくも取りたる關を敵に取もとされては、我何の顏ありてか、南洲先生に見ねむや。敵のいまだ息をもつかざる中に攻めよせむとて、急に東口より

箱根宿へ向つて上る。今しも關所は戰方さに酣にして、叫喚の聲、鐵砲の響に和して最と囂ましく、湖にひゞき山に應へて凄まじき有さま云ふばかりなし。時こそ好けれと清左衛門、忽ち鬨の聲をあげて、鐵砲を打いだしぬ。官軍は數倍せる多勢なるか上に、その腹背にあることゝて、敵せむやうなく、林勢は暫く中に隊くづれて仆るゝ者多し。

忠崇よて急に士卒を納め、かつ云ひけるは、わが軍太だ少なくして、到底この大軍に抗すべくもあらず。そも一日長く存ずれば、一日多く忠を德川氏に盡すなり。いまだ容易に屍を箱根の山にさらすべからず、又なす術のなきものかは、まことくちをしき極みなれと、今更に詮なし。先づ箱根を捨てむとて、隊を分ちて二となし、一隊は自ら之を率ゐて、間道を熱海にのがれ、一隊は關を衝て湯本にいでしめぬ。

湯本にいでたる一隊は、急を小田原藩に告げて援を乞ふ。小田原藩こゝに至りて、また忽ちに欵を官軍に通じ、兵を三枚橋に出して、この一隊を

要擊す。林勢大にその反覆常なきを怒りて、迎へ戰ひ、之を破りしかと、官軍のその後を逐ふて來るに會し、早川口より海岸にいで、江の浦、眞鶴より舟に搭じて上總に落つ。忠崇、熱海にありてこの報を聞き、今は相州も事を成すべからずとてまた海を航して上總にかへり、癈を養ふて時を待つことはなせりき。

かくて西鄕隆盛は、錦の御旗を押し立て東武に入り、ついて江戸城をも取りぬ。忠崇、悲憤やる方なく、今は關八州も腰ぬけばかりとなれり、奥羽十餘州中また我が志を憐むの男兒なからでやはとて、心知りたる士卒を携へ、處々に戰ひつゝ仙臺に入りぬ。

時に板垣退助、會津を降し、秋田等の大藩もまた官軍と事を共にすることになりしより、仙臺をはじめ大小の諸藩みな爭ふて降り、さしも昨日までは山もさけ海もあせなむばかりの戰も、一夢と消ねいと麗らかなる御代となりて、車駕東に幸し、千代田の御城に禁めさせられて、鎌倉こ

のかた武門にうつりたりし朝政をきこしめさせ給ひぬ、かくて錦旗に抗せし諸藩の罪をも許させられ德川氏の祀もまた絶たさせられず。忠崇乃ち喜びて曰く、我はた誰か爲めに苦辛を嘗めて劒を磨かむや。必竟薩長土肥か德川氏を仆して、おのれ之に代らむとするの有さまありしをもて、我自ら揣らず、劒を執りしのみ。草も木もみな大君の物なり、聖上朝政を親からしたまふ上は、我はた誰に向て爭はむやとて、此に於て、親から散髮になりて入道一夢と號し、また口に世事を語らず、功名富貴の事において、恰かもそか眼を過る雲煙にも異ならず。その頃、忠崇の詠みすてたる歌。

世の中のうつり變れるさま〳〵は
おのが學ひの種とこそなれ

この後、忠崇、人の鷹るまゝに、宮内に入りて小職を奉す。いくほどもなく故ありて之を辭し、去つて日光山に上り、形ばかりの幻住を卜して老を